

---

# ~碎牙~

武泰斗

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

「碎牙」

### 【NZコード】

N8444Y

### 【作者名】

武泰斗

### 【あらすじ】

魔法と冒険の時代、大国アトモスにある「王立第一魔法学園」である少年と少女の再会から物語は動き出す。

## 人物紹介（前書き）

人物紹介です。 隨時更新予定  
本編で語られないキャラ設定もあります。  
ただし、ネタバレ注意

## 人物紹介

ゼノ・アルフレイン

物語の主人公

髪の毛：灰色

瞳の色：青

適正属性：無し

『杖』の種類：素手

十歳のときに両親が失踪したため、伯父であるジンに引き取られた。それ以来クローゼ村でそれなりに幸せに過ごしてきた。幼少時代に周りからいじめを受けていたため、他人を貶める人間が大嫌い。

五年間伯父やその知り合いに散々「かれたため運動能力はかなり高い

サンドラ・ルミール

ヒロイン

髪の毛：赤

瞳の色：黒

適正属性：水、樹、雷

『杖』の種類：長杖

ゼノの幼なじみで彼と再会を誓つた女の子  
幼い頃から魔法を使うことができたために、当時は周りの子供達に避けられていた。

成績優秀で、さらに美人で性格も良いため、友人関係は良好。三種類の適正属性をもつ。

学園では「紅嵐」と呼ばれている。

ジン・アルフレイン

ゼノの伯父

髪の毛：茶色

瞳の色：青

適正属性：火、水

『杖』の種類：カットラス

ゼノの育ての親的存在元冒険者で剣術と攻撃魔法が得意、現在はクローゼ村で狩人をしている。

「おじさん」と呼ばれるのが嫌い。たとえ甥っ子にあたるゼノに伯父さんと呼ばれるのも嫌。ちなみに39歳……おじさんじゅん親と村に捨てられたゼノを引き取つたが、それ以来娘がゼノにベツタリなのが悩み

ミリア・アルフレイン

ゼノの義妹？

髪の毛：茶色

瞳の色：翠

適正属性：水

『杖』の種類：鉈（薪割り用）

ジンの娘、始めてゼノと会つたときに一目惚れしたらしい。ちなみに当時7歳。もちろんゼノは気付いて無いが……。父親譲りの剣術と母親譲りの治癒術の才能を持っている。

義妹となつてゐるが正確にはいとこ。

ミランダ・アルフレイン

ジンの奥さん

髪の毛：水色

瞳の色：翠

適正属性：水、樹

『杖』の種類：短杖

誰にでも優しく料理も出来る美人な万能奥様。ただし、話題が年齢に関するものになると修羅と化す。

村に来たばかりで傷心していたゼノが最初に心を開いた人でもある。ただし、ゼノに自分のことを母さんと呼ばせるのに一年以上かかつた。

村長

クローゼ村の村長  
以上！！

スズカ・イスルギ

学園の先輩

髪の毛：黒

瞳の色：黒

適正属性：火

『杖』の種類：鉄扇子

東の最果てにある大和出身。とにかくテンションが高い。中等部の2年から第一魔法学園に編入した。一年ほど前から北地区にある喫茶店でバイトをしている。

世話好きで優しい性分だが、テンションの高さのせいで台無しになっている。

カワイイものにめがない。ちなみに一つ下の学年に妹がいる。

シムジウ・ハング

ギザ野郎改め噛ませ犬

適正属性：火、風

『杖』の種類：ロングソード

自分の嫌いな人物を思い出してみよう。それが彼の外見だ！！

ちなみに名前を逆から読むと……

ナズナ・イスルギ

サラのルームメイト髪の毛：黒

瞳の色：黒

適正属性：地

『杖』の種類：？？？

東国の大和出身。中等部の2年の時に学園に編入してきた。ルームメイトのサラとは親友同士。

ハイテンション過ぎる姉と、何時くるか解らない親友のボケが悩みの種

オルデイン・ラグナー

杖職人

髪の毛：茶色

瞳の色：茶色

適正属性：樹、地

『杖』の種類：槌

「オルデインの武具屋」の店主。鉄製でも木製でも彼にかかれば最高の一品が出来上がる。ただし気に入った相手以外には、店に並んでる地味な商品しか売つてくれない。よく店の扉を一部の学生に破壊されるのが悩み。ちなみに62歳、まだまだ現役。

マルク・マグリット

ゼノのルームメイト

髪の毛：金

瞳の色：碧

適正属性：火、水

『杖』の種類：？？？

アトモスの隣の聖皇公国出身。運の無さには定評がある。

彼のルームメイトであるゼノは突然ボケをかますため気苦労が絶えない。

適正属性は2つあるが、魔力の総量が少ないため強力な魔法は使えない。また同じ理由で中等部に入学できなかつた。

普段は控え目だが、いざとなると頼りになる。

マオ・フェイ

クラスの担任

髪の毛：黒

瞳の色：黒

適正属性：雷、樹

『杖』の種類：グローブ

高等部1-Dの担任、32歳独身 東国出身。

よく授業をサボつて舍コンに行く…………何でクビにならないんだらうこの人……

ゲイリー・ブリット

隣のクラスの担任

髪の毛：青

瞳の色：茶色

適正属性：火、地

『杖』の種類：ナイフ

隣のEクラスの担任、よくマオの尻拭いをさせられる可哀想な先生  
髪の毛が青なのに水属性がないことを微妙に気にして  
キレると叫ぶ

## プロローグ

「本当に行つちやうの？」

少女は泣きそうな眼で田の前の少年にたずねた。

「仕方ないよ、俺みたいな役立たずを引き取つてくれる人なんて他にいなかね…」

少年は少し困った顔をしながらそう答えた。

「違うよ！ゼノは役立たずなんかじゃない！村の皆がゼノの良さを理解してないだけだよ…」

「俺の良さ？そんなの存在しないよ、頭も悪いし魔法の才能も無いし、それに何より…」  
少年…ゼノは俯きながら呟いた

「あんな最低な親達の息子何だから…」

「…でもそれはゼノのせいなんかじゃ…」

ゼノの両親はつい先日、ある事件を起こして失踪した。

……たつた一人、十歳になつたばかりのゼノを残して

「それに村の皆が言つてるよ、『お前みたいな落ちこぼれが村に居座ること自体間違いだ』つて」

ゼノには魔法の才能が無かつた、それどころか、ひとつに最低一つはあるはずの魔法の『適正属性』すら無いため村の同年代の子供達

からいじめを受けていた、また、彼の両親は息子にほとんど興味を示さず、彼とともに会話を交わすことすら無かつた。

ただ一人、目の前の幼なじみだけが彼の唯一の味方だつた。

「でもゼノが居なくなつたら、わたし……」少女は涙を流しながら力無く呟いた

「大丈夫だよ……サラならきっと俺がいなくてもやつていけるから。」

「でも……」

「サラには魔法の才能がある。だからきっと、他の皆ともすぐに仲良くなれる。……もう俺を庇つ必要も無くなるしね。」

ゼノは、俯いて泣いている少女・・サラに微笑んだ

「俺さ、向こうに行つたらおじさんに剣術を習つてみるとしたんだ。」

「？」

「だから約束するよ！次に会つまでに絶対に強い剣士に成るからさ、楽しみにしてよ……ね？」

「グス……わかった。でももう一つ約束して……」

サラは涙を拭いながら言つた

「絶対に……絶対にいつかわたしに会いに来て。」

ゼノは笑顔でそれに頷いた。

「小僧、そろそろ時間だ。」「……はい、わかりました。それじゃまたねサラ……」

「またねゼノ……」

ゼノはサラと最後に微笑みながら別れの挨拶を交わし、魔動車に乗り込んだ

「挨拶はすんだか?」「

運転席で男が尋ねた

「うん」

「じゃあ行くが」

走り去つていく魔動車をサラはこいつまでも眺めていた

「ねえおじさん」「おじさんじゃねえーお兄さんだー…………」「メン。

お兄さん

「なんだ?」

「向いの向田ぐらー着ぐの?」

「……だいたい二田ぐらーだ。」

「そつか、遠いね……」

「だからよお、こつまでもそんなひでえ顔されたらこいつが参っちまうからよ、こまのつちに泣いておけ。」

「…………グス、うわああああああああああ…………」

ゼノの悲鳴のような泣き声が草原に響き渡つた。

## 1話 五年後（前書き）

初投稿の作品なので、へたくそな文ですがよろしくお願いします。

「s i d e · ゼノ」

「うへん。」

朝か、なんだか懐かしい夢を見た気がする。故郷の「ハング村」を旅立つたときの夢か…

もうあの日から五年も経過したのか、はやいもんだ、あれつくり幼なじみのサンドリとは一度も会っていない。

「まあ、俺のことなんてもう忘れているかもな…。」

それに気まずいんだよなあ、あのときの約束破つちやつたし

「ゼノ~~~~~朝ご飯できたからそろそろ起きなさい」

下から母さんの声が聞こえた、そろそろ起きなが

リビングにおりたら見知った茶髪の男性が声をかけてきた

「おうー！ 起きたかゼノ」

「おはよーおじ！ 「ああん！」 … 父さん」

「この人は「ジン・アルフレイン」五年前に俺を唯一引き取ってくれた人で、恩人であり育ての親でありそして、師匠でもある

ちなみに俺を捨てた父親の弟だから俺の伯父なんだけど「おじさん」と呼ぶとひときみみたいにキレる……今年で39歳のくせに

「まつたく、最初からひびき呼べばいいんだよ」

「ははは…」

「おはよひせり」

キッチンから女性の声が聞こえる

「おはよひ母さん」

「まつたく、オレの」とは今だにおじさんのがミランダにまは母さんかよ

「いや、でも父さんひ呼ぶとたまに怒るじやん」

「オレが? んなこたあない。だからひやんと父さんと呼べ。」

よくこいつよ…まあこいや早く席につこう。と思つたら少しあの影が  
背後から突貫してきた。

やべ、変な声でた…

「おはよーーゼノにーーー。」

「グボア」

「おまゆつ……、朝から元気だねミコア」  
この少女の名前は「ミコア・アルフレイン」元々この家の娘で今年  
で12歳、五年前俺がこの家に引き取られて以来俺のこと兄とした  
つてくれている

俺ひとつは可愛い妹だ。…元気あざむけども、まあいいけど

「え~と、ヒーリングコトア…」

「なあ~こ~」

「そろそろ離れ「こ~…」…「やめつ」

「…前方から凄まじい殺気が…」

「おこ小僧、歯あ食こしばれ。」

「こや、あのと、父さん?」

「誰が!『義父』なんだ!」

「ちよつ~…わしちき自分で呼べつ~…」

「問答無用」  
「アスー」「ナードサツ

「わあい!飯こあるわよ」ミコア、元々の名前を離してあげ

なあ~。

「はあ~こ~」

母さんの手には角に血糊が付いたまな板がぶら下がってた…まあ  
いなび…

「それにしても一人共今日から王都に行つちやうのか……寂しくなるわね。」

「うん……俺も今回よつやく編入試験に受かつたからね。」

そうだった、今日から王都にある魔法を学ぶための学校「王立第一魔法学園」に通うために王都に旅立つんだった。

魔法とは、体内に眠る魔力を用いて発動することができる術のことで魔術ともいづ

そして魔力とは、生物が持つている生命エネルギーのことで、これが多いほど強力な魔法が使いやすいのである。ちなみに魔力の総量は修行することによつて増加させることが出来る

#### 閑話休題

もちろん魔法の才能が乏しい俺にも魔力は存在するため、簡単な魔法なら使うことができる。はずだ。

ちなみに試験には今までに3回落ちました……

「やつしょえば学年はどつなるの? まさかふたりとも同じ学年?」

「違つよお母さん、あたしが中等部の一年生でゼノニーが高等部の一年生だから別々だよ。……残念ながらね」

「？最後ボソボソと何か言ったか？」

「べ、ベジになんにも…」

あきらかに怪しいな…。まあいにげど

「あらそりなの。でもこきなり高等部からで大丈夫なのゼノ？」

「心配いらぬことよ。むしろ高等部から受けに来る人だつていうべら  
いだし。」

「まあそれにオレが五年間も鍛えてやつたしな ガツハツハ！」

と父さんが笑いながら続けた

ていうか父さん… いつの間にリカバリーしたんだ？

「でもゼノには勉強できないからあたし心配だなあ…。」

いや妹よ、ハツキリと言ひ過ぎじゃね  
ていうか妹に勉強の心配されると…………まあべつに……いやよ  
くないか。

「まあ勉強できないのは認めるけどその分は実践科目で補つよ。」

「でもゼノには魔法も苦手じゃん！」

「なんだろう、妹は俺のことが嫌いなんだろうか？」

「 うひー、ミコト、そのへりにしなさい。お兄ちゃんが困ってる  
でしょー。 」 と母さんが割って入ってきた

「 いつか母さん、あなたが心配とか言い出したのが原因なんだけ  
ど…。 」

俺は軽くため息を吐きながら荷物をまとめに部屋に戻った。

## 1話 五年後（後書き）

「意見、ご感想をお待ちしております。」

## 2話 第一の故郷（前書き）

学園までまだまだかかりそうですね。

## 2話 第一の故郷

「こ」は「クローゼ村」、周りを樹海に囲まれた「大国アトモス」にある古びた村である。

その村の入口にたくさんの村人が集まっていた。

「それじゃあゼノ、氣をつけて行つてくるんじやよ。」

「はい、村長！」

「ところで、ミコアは何処にいるのかの？」

「の老人はクローゼ村の村長、村人皆に好かれているおじいちやんである。

「ミコアならそこで友達と話してゐよ。」

と、ゼノが指した方では、ミコアが同年代の女友達に囲まれ別れの挨拶を交わしていた。

「ゼノ君ー王都に行つたら氣をつけるんだよー知らない人について行つてはいけないからねー！」

「うん、ありがとうお兄さん」

「オッス！ゼノ、お前がいなくなると狩りが忙しくなつちまーな。」

「うん、『メソンおつちやん』

「ハツハツハ！…そんなん氣にすんな！それにしてもたつた五年での『どへタれゼノ』がこんなに立派になりやがるとはなあ。」

「こひら、あんた邪魔だよ！…わつわどどきな……ゼノ、つらい事があつても挫けるんじやないよ。それから『リアちゃんの』ことをしつかり守るんだよ！」

「わかりました、おばさん。…それからもう少ししおじさん』に優しくしてあげてね。』

（本当にこの村の人達はいい人ばかりだ！

よそ者の自分をあたたかく迎え入れてくれただけじゃなくこんなに別れをの言葉をかけてくれるんだから。）

「そろそろ出発します。準備をしてください。」  
と学園行き魔動車の運転手が告げた。

ちなみに「魔動車」とは、百年ほど前に馬車に代わる交通方法として発明された魔力で動く馬要らずの馬車である。利点として、交通速度なら馬車よりも格段に速く、さらに馬の休憩も必要としないすぐれものである。

ただし、重い物を運ぶことはできないため、行商人などはいまだに馬車を使用している。

「」クローゼ村にも魔動車はあるが、学園行きの魔動車は王都で開発された最新型なので、村のそれとは比べ物にならない性能なのである。

ちなみにクローゼ村のような王都から遠くの村や町にこる生徒にはこのように王都から迎えがくるのである。

#### 閑話休題

「それじゃ、ミコア行こう。」

「うん。」

「ゼノ、ミコア、体に気をつかるのよ。」

「まあアレだ！一人共楽しんでいい。」

「はい。」

「はい。」

「」とミコアは「」とソラに向かって返した。

「それじゃ行きます。」

「」じて一人を乗せた魔動車は王都を目指して出発した。ゼノ

の第一の故郷をあとにして…

「……………」

「……………」

### 3話 魔動車にて（前書き）

ついでに適正属性についての説明が書きました。

### 3話 魔動車にて

「side・ミリマー

あたし達がクローゼ村を出発してから4日目。

いつも田が沈む前に近くの町で宿をとっているから、夕方の僅かな時間だけだけど、あたしは3日間ゼノにいと一緒に町を探検したり、お店をまわったりして過ごしていった。

その間ゼノにいと腕を組んで歩きまわった。あたしにとつてはちょっとしたデート気分だった。

そういえば、途中ですれ違う人達がたまに、ゼノにいのことを見て小声で「ロリコン」って言つてたけど、どういう意味なんだらう? 聞こえる度にゼノにいは「兄妹です!」って叫んでいたけど…。

それから、泊まった宿は三つ共すつひとつ大きく大きな宿だった。運転手さんに聞いてみたら「魔法学園に遠くから通いに来る生徒のために、学園側が事前に予約をとつてこらんんですよ。」って言つてた。

そんな感じで王都までの道のりを過ごしていったんだけど…

「なあ運転手さん。」

「なんでしょうかゼノ君。」

「王都には後どれくらいで着くんだ?」

「またですか…。いいですね、おおむね3時間ぐらいで着るまかな。

L

「うう~一過屈過ぎる…。」

今日は朝からゼノにいはこんな感じで落ち着きがない。最初の頃は魔動車の窓から景色を見てハシャイでいたのに…。どうやら4日目の最終日に飽きたらしい。

「も～、うるさいよゼノにい～！」

「アーティストでアーティストだよ、アーティスト。」

「じつせなら教科書読んで予習してなよ。」

そう言いながら、あたしはカバンから教科書を取り出して、ゼノに  
いに差し出した。

「…んな難しいもの読めねえよ…。」

いやがほここ、こたむけこひれ中等部用だよな……。

あたしは仕方なく自分で教科書を読む事にした。

# 解説！！はじめての魔法学

魔法とは、体内に眠る魔力を用いて意図的に引き起<sup>ひ</sup>し<sup>ま</sup>すとの出来<sup>しゆ</sup>る奇跡<sup>きせき</sup>である。

誰にでもそれが得意とする属性が存在する。この属性のことを『適正属性』といつ。

第一章

## 第一節 適正屬性

適正属性とは、簡単に言うと魔術師個人に最も適した属性のこと。ここで忘れてはいけないのは「適正属性以外の属性も、簡単な魔法なら使用することが出来る」ということである。日常生活で使われている魔法の多くは、誰にでも使うことが出来る。

ある程度なら他の属性も使いこなすことが出来るのである。

## 第一節 属性の種類

魔法の属性は大きく分けると5種類ある。

「火属性」

主に火を扱う属性であり、細かく分けると、熱と炎などが分類される。

「水属性」主に水を扱う属性であり、氷や霧、そして怪我を治す治

癒魔法などが分類される。

#### 「樹属性」

主に自然に関係する属性であり、風や樹、そして毒魔法やそれを治す医療魔法などが分類される。

#### 「雷属性」

主に電気を扱う属性であり、雷や磁力などが分類される。

#### 「地属性」

主に物質に関係属性であり、地や鉄、そして鍊金術などが分類される。

以上の5種類が五大属性と呼ばれる、魔法の基本である。

~~~~~

そこまで読んでもたしは本を閉じた。

「うーん、やっぱり魔動車の中じゃあ集中して読めないや。…あれ? ゼノにい?」

「……………！」

…… いつの間に寝てる。

「ふあ～あ、あたしも既へなつてきちゃつた。」

今内にゼノにいの膝枕で寝よつと

↓ side out ↓

ゼノ達の4日間の旅もついに終わりが見えてきた。

「ほり、一人とも起きてください。」

「ンア…？あれ、どうしたの運転手さん？」

ゼノは眼を擦りながら眠そうに運転手に聞き返した

「ほら見てください。あれが王都の名物のひとつ大城壁ですよ。」

「？？？…………お、おにミコア起きり、見てみろよー。」

「もひ、なんなのゼノにい…？！」

二人の目の前には高さ20メートルにも及ぶ、巨大な城壁がそびえ立つていた。

「スゴい！…横幅もものすごい長い！…」

「キャー！スゴい！スゴい！スゴい！…」

「王都全体を囲んでいますからね。ちなみにゼノ君が住んでいたクローゼ村が軽く100個は入りますよ。」

「えええ！…そんなに広いんですか？！」

「もちろん！王都内には学園以外に、もたくさん施設や住民の居住区、そして宮殿がありますからね。」

「せうか、そういうえば王都なんだから宮殿があつて当たり前か…。いや、でもさすがに100個って…。」

「まあ、クローゼ村はあまり大きな村では無いですからね。とてもあたたかみのある優しい村ですが…。」

と、運転手は続けた

ゼノは少し照れながら笑った。

「スゴい！スゴい！スゴい！スゴい！スゴい！スゴい！スゴい！…」

「おーい…リリアー…そろそろ落ち着こうな…。」

しかりしてゐるなりでもリリアはまだ1-2歳の少女なので、始めての王都にハシャイでいた。

まだ外壁なの。

やうじうじこむひばり、魔動車は城壁にあるひとつの大門の前にたどり着いた。

「はい、じゃあ次の方どうぞ。」

鎧に身を包んでぶしうひげを生やした門番が氣だるやうに告げた。

「やあビスー調子はどうだい?」

運転手が親しげに門番に問い合わせた。

「よお、誰かと思つたらマルコじやねえか!つてことは乗つているのは誰だよ?」

門番のビスはやうに親しげに運転手のマルコに返した。

なみに、ここまで頑なに「運転手さん」で通してきたが、そろそろ扱いやすくなつてきたため諦めて前を付けた。

「ああ、だから手続きのほうを頼むよ。」

「任せとけ！… よし、 そんじゃ ボウズそれから 嬢ちゃん、 入学証明を見せてくれねえか？」

門番のビスはゼノとミリアに問い合わせた

「ハイ。えつと……あつた！これでいいですか？」

「おうバツチリだ！ そんじや……ほら、こいつが許可証だ！」

そう言って、ビスコニアに腕輪を差し出した。

「次からこいつを見せてるだけで門を自由にぐぐれるからな。くれぐれも無くすなよ。」

「ハイ！……ところでゼノにい何してるの？」

ミリアが問いかけると……

「……ヤバイ、入学証明忘れて来た……。」

と真っ青な顔でゼノが答えた。

「ちよつ！どうするのゼノにい！入学式明後日だからもう間に合わ

ないよ！」

「ヤバイ…マジでじつじょう…」のまじや父さんにシバき倒され  
る…いや待てよ、今回ばかりは母さんまで参戦してくるかも！」

「いやいや、心配する所が違うんじゃないかな？」

マルコが苦笑しながらつっこんだ。

「落ち着けボウズ。アレだ、身分を証明出来るもんがありやあなん  
とかなる。」

「本当ですか…!…ってかホントに…!…」

「ああ、毎年オメエみたいな奴が必ずいるからな。此方も救済措置  
ぐらい用意してる。」

ゼノは急いでカバンを漁ると中から一枚の金属製のカードを取り出  
した。

「じゃあこれで…!…」

「だから落ち着けって…。おお、『ギルドカード』じゃねえか。」

ギルドカードとは、冒険者がギルドに所属していることを証明する  
カードで、個人の名前やレベルが記載されている。

ギルドやレベルについての説明はまたいずれ。

「ボウズ冒険者だったのか？どれどれ…………」

「……あ、あの～何か問題でもありましたか？」

ゼノが恐る恐るきいてみると

「…………いや大丈夫だ！えつと名前は『ゼノ・アルフレイン』だな、え～と……お！ちゃんと名簿に名前が乗っているな」

「そんじゃあ……ホレ、ボウズの分だ。とにかく……」

ビスは腕輪を渡しながらゼノに問いかけた。

「学園に通っていた訳じゃねえのに、なんでギルドに冒険者登録してたんだ？」

「べつに大した理由じゃないですよ。故郷がド田舎にあるから、冬の間はそれぐらいしか稼ぐ方法が無いんですよ。あと修行も兼ねて。……いうか学園とギルドって何か関係あるんですか？」

「ああー授業の一環としてギルドでクエストを受けてるからな。もつとも、高等部からだが。」

「さてと、ボウズその腕輪絶つつ対に無くすなよー。」

「う、わかりました……」

「うして一行を乗せた魔動車は門をくぐつてこも、みちやへ王都への旅に終わりを告げた。

走り去つていいく魔動車をビスは眺めていた。

「あの灰色の髪の毛にあのギルドカード、……あれが尊の『牙折り』か。」

門番の弦きは風に流れれて空に消えていった。

3話 魔動車にて（後書き）

王都到着。……………何時になつたらヒロイン出でてくれるだろ？。

## 4話 王都到着

ゼノとミコアは、運転手のマルコに別れを告げ、学園を目指して歩いていたが - -

「それにしても……スゴいね。」

「ああ、ものすごい広いな。……で、ここは何処だろ? - - わざと迷つていた。

「王都アトランダ」は、大国アトモスの南部にあるこの国最大の都市である。

都市内は北、南、東、西、そして中央の五つの地区で成り立つている。

ちなみに第一魔法学園が在るのは西である。

ゼノ達は、北の城門から王都入りしたため、現在北地区にいるのだが

「えっと、向こう側が西地区のはずなんだけど……建物が邪魔で進めないし」

彼等がいる北地区は、商人や冒険者がよく訪れるため、あらゆる店や宿が密集しており、迷宮と化していた。

ちなみに冒険者ギルドもここ北地区に居を構えている。

「ゼノにい……お腹すいた……」

「やついえば、昼飯はまだだつたか？」

「じゃない、そこの食堂でメシにしよ。」

ゼノは近くに在つた、少し大きめのキレイな食堂を指差したて言つた。

カウンタロン

「こりつしゃいませー何名様ですか？」

店に入ると同時に、ポニー・テールの女の店員が笑顔で訪ねてきた。

「え、えーと、こ、一名です……」「ただいまカウンター席しか空いてませんがよろしいですかー」

「ハ、ハイ」それではこちらの席へどうぞ……「……」

二人は店員の勢いにおされながらもあとに続いた。

「こりつしゃいませ。」注文が決まつたらこちからへお声をおかけください。」

カウンター席に座ると、正面からダンティな男の店員が声をかけてきた。

「すいません、その前に少し聞きたいことがあるんですが良いですか？」

「ええ、かまいませんよ。」

ダンティな男は渋い声で答えた。

「えっと、第一魔法学園に行きたいんですけど道に迷ってしまって……。よろしければ道をききたいのですが……。」

「なるほど。王都に来たのは始めてですか？それなら「あれ！君達魔法学園の生徒なの！？」

ゼノとダンティが会話をしていると、先ほどの店員が勢いよく割り込んできた。

「ええ。先ほど王都に到着したので学園に報告に行こうと思つていて……あなたも第一魔法学園の生徒なんですか？」

「 もうひんー 明後日から高等部の2年になるのよー。」

ゼノの聞こに店員は元気に答えた。

「それならスズカさん、もう少しで今日のバイトは終わりですが、彼等を学園まで案内してあげてはどうですか？」

ダンテイは上声勘人並の渋い声色でそう提案した。

「そんな… やすがにもうしわ「それはこ…考…ね…そ…う…し…ま…し…よ…」  
「…」け…な…い?」

スズカと呼ばれた店員は即断した。

「いえ、でも「いけない!…注文が入つたんだつた!」 それじゃまた後で…」…こ…つ…ち…や…つ…た…よ。」

「お腹…す…い…た…」

れつやからまつたく会話に参加してなかつたミリアが呟いた。

- - - - -

「…」  
「…」

「それではお会計は合計1,000円です。」  
〔ハーフ〕

ゼノは財布から500と書かれた金貨を一枚取り出した。

「それでは、ちゅうど1,000円いただきます。 ありがとうございます。 ありがとうございます。またのじ来店をお待ちしておつま「あ…それじゃ行きましょ…」お疲れさまでしたバイトリーダー!…」…お疲れさ

までしたスズカさん。」「

「言わせてあげようつーーーあと一文かべりこ言わせてあげようつーーー。」

ゼノは腹の底から声を張上げてツッコムをいった。

「……おのれじやん、バイトだつたんだ……。」

ミコアはボソッと呟いた。

5話 特別版 (福井版)

ゆうゆく公園に着きました

（side・ゼノ）

食堂を出てから俺達は、北地区の『ゲート』に向かつて行った。

そもそもクローゼ村の100倍以上の広さの王都を、歩いてまわるのは無理があるそうだ。……冷静に考えればたしかにそうだ。

そこで都市を行き来するために用いられるのが、「魔術式転移門」通称『ゲート』だそうだ。

「ゲートは大昔に存在したと言われている『時空間魔法』の研究中に偶然実用化に成功したという、王都が誇る大規模魔法陣なのよ！」

と、さつきスズカさんに質問してもいよいよ説明された。

しかもドヤ顔で……けつこうういらつときた。

「ゲートはそれぞれの地区に3つあって、それを使って都市内それぞれの地区に行くことが出来るのよ……」

と、ドヤ顔のまま続けてきた。

どうでもいいけど毎回あんな大声をだして疲れないんだろ？

そして現在 - -

「ほらー！あそここの店が雑貨屋でそっちの店が防具店よ……あ、心配しなくても西地区に行けばもつと可愛いお店もあるからね！……今度いつしょに行こううね！」コアちゃん……

「あの……その……あつひ……

「妹が、ものつそい勢いで絡まれてます。  
どうしてこうなったんだつけ……？」

（回想中）

「それじゃー！まずは自己紹介から！私はスズカ！スズカ・イスルギよー！出身は東国の大和！『杖』はこの扇子！それから……」

と、やはつこちが何か喋る前に、一方的に情報をぶちこんできた。

「……でー！趣味はーーーあとーーーはーーーでー！そういうば最近ーーー  
「もう大丈夫ですーーー」

「そう？まあ私だけが話してもしょうがないもんね！」

すでに十分過ぎるぐらいにしゃべり倒してんだらうが！……

と内心思っていたけど

「ええ、そうですね。」

「この時まったく態度に出さなかつた自分を讃めてあげたい。」

「ゼノ・アルフレインといいます。 明後日から高等部の一年になります。」

「じゃあ私の方がお姉さんなんだ!『スズカお姉さん』って呼んでね!」

「いえ、さすがにあれなので遠慮せさせていただきます。」

「そ、そつ……。」

あれ?ちよつとへこんでる?

「まあ、セニはこれから話しあっていけばいいか…。」

そこには諦めてくれ!

「えつと、じゃあスズカ先輩で。」

「先輩? そつか先輩か…それもいいわね!…これからは私のことをスズカ先輩と呼んでいいからね!」

復活しやがった…。まあいいけど…。

「それじゃ早く続きを聞かせて!」

止めたのはあなたです。

「そうですね……出身はアトモスのずっと北の方にあるクローゼ村

です。えつと……以上です。」

「え～それだけ!/? もつと趣味とか教えて!~ね」

ね と言われても…

「… ちょっとあなた、いい加減にしてください… もつきから  
ゼノに…」つまどつて!~何なんですか!~?」

「ノルマニア、そんなに怒らなくともいいだろ?」。

妹よ、よく言つた!

「うー、うん…」めんなれ…」

ミコトはしょんぼりして謝つた。

「… か、かかか…」

あれ? ドリ「カワイイーーー!~ なにこの娘ー!~スッゴくカワイイ  
!~」

「「え?」

「お前は!~?」

「ノルマニア・アルフレインです!~

「今何歳!~?」

「えつと、12歳で…」

「じゃあ中等部の1年生になるんだ!~!~

「あの、は…」。

「私のことは『スズカねえ』または『ねえね』って呼んで……」「それはちょっと……」

「好きな食べ物は！？それから……」「

（回想終了）

（side out）

何故かミリアのしょんぼりした姿と、その前のゼノ「にー」という言い方がツボだつたらしい。

「いい」と思いついた！ 今度私の部屋に遊びにおこでよーー！「アチャyanに似合ひそなカワイイ服がいっぱいあるからーー。」

「そりいえば先輩、ゲートつて始めてなんですかけど、どんな感じですか？」

さすがにミリアが心配になり助け船をだすゼノ

「え！ そりね… それは見てのお楽しみかなー もうすぐ着くから楽しみにしててね ああ行きましょー！」

なんとか救出に成功したようだ。

「……ミリア、今度から人前では兄さんと呼ぼうな？」

「わかつたゼノに… お兄ちゃん。」

兄妹は約束を交わした。

そんなこんなでゲートに着いた三人

そこには地面に巨大な魔方陣が3つ描かれていた

「ほら！あの魔方陣がゲートよ！ ゲートは30分に一回のペースで起動するようになってるのよ！」

「へ、それにしてもすごい人の数ですね。」

「もうすぐ午後5：30だから東地区の居住区に行く人がほとんどだけどね！」

「あれ？でも真ん中の魔方陣だけ人が少ないね。」

「んふふふ よく気付いたね！一人共氣をつけてね - -  
スズカは珍しく少し引き締まつた表情で説明した。

「 - - 南地区は貴族街だから貴族や一部の商人以外立ち入り禁止な  
のよ...」

「へえー、なんで南地区に貴族が集まつているんですか？」

「それはね！ - - えつと、あれ！？ ねえ、なんだつたつけ！？」

ゼノの質問に、スズカは故かミリアに答えを求めた。

「えつ！ いや、あたしに聞かれても…。」

「ところどだからゼノ君…」「めん わからぬいや」

この時ゼノはいまさらだがふと思つた…。

(この人メンドクセー)

無駄話をしてくるうちこじよいよゲートの起動時間になつた。

ゼノ達がいる西地区行きのゲートはそれほど人がいなかつたが、2つ隣の東地区行きのゲートはとても混雑していた。

「もう少し詰めてください！」「いでつ！ てめえ何ひとの足踏んでんだ！」「ちよつと！ あんた今私のお尻触つたでしょ！！」「えつ！ ？違う！ 僕じゃない！ 本當だ信じてくれ！！」「 - - - ！ ゼ「い」でつ！ てめえ！ …今度はスネを蹴りやがつたな！ …」「それでは…」  
ゲート起動！…」「

次の瞬間、広場は静寂に包まれていた。

いや、広場自体が変わっていた。

「到着！ …さあ学園を目指しましょう！ 学園までは真っ直ぐだ

がら迷う心配は無いけどね！」

「いやいや！ ちょっと待つてください！ 今なにが起きたんですか！」

「一瞬で人の人達居なくなっちゃった…。」

狼狽える一人に対し、スズカは - -

「ああ、大丈夫だよ！ 西地区のゲートに移動しただけだから！」

と告げた。

「あんな一瞬で？」

「これが王都か…。」

と、よくわからない結論をだす一人だった。

- - - - -

「さあ、着いたよ！ ここが第一魔法学園よ！」

目の前には石造りの巨大な建物が建っていた。

「 - - すげえ…。」

「 - - 王都に着いてまだ数時間しか経つてないのに… 一生分驚いたきがする。」

田舎育ちの一人にとって、学園はものすごい迫力があつたようだ。

「後はそこの受付のおばさんに聞いたり学園と学生寮までの地図を  
もらえるからねー！」

「あー！はー、わかりました！」

「どうもありがとうございました。」

「どういたしまして！ 何かあつたら何時でも頼つてねーそれじゃ  
！またねー！」

そう言つとスズカは去つていった。

「悪い人では無いんだよね……」

「疲れるけどな……」

一人はそう呟いて、その背中を見送つた。

## 6話 Another side

側面…？？？

側面…？？？

『本当に元気ですか？』

『でも…』

『もう一つ約束して…』

『絶対にいつかわたしに会いに来て。』

側面…？？？

……………今は？

そうだ、あの時の…

「…夢？」

わたしは寝ぼけ眼を擦りながら、部屋中を見渡した。

「…は？」

えっと…そうだ、思い出した。

「…は王都アトランジの東地区にある学生寮だ…

故郷のハング村から三日かけて、昨日の昼間に王都に着いたんだつた。

「ハング村か…。」

わたしは自分の故郷のその村が大嫌いだ。

小さい頃、わたしは周りの子供と比べて魔法の才能があった。5歳の時に適正属性を調べたら属性が3つある事がわかった。6歳の時にはすでに基礎魔法が使えるようになっていた。

わたしが周りの子供から爪弾きにされたのはその辺だつた。

誰もわたしと会話をしようとしたしなくなつた。その内、田も合わせてくれなくなつた。

それどころか酷い時は化物と言わることもあつた……ただ一人を除いて…。

そのくせ、3年前にわたしが第一魔法学園中等部の受験に受かつた  
ら周りの態度は一変した。  
それまでわたしを除け者にしてた村の子達は途端にわたしに集ま  
ってきた。

正直、気味が悪かった。自分のことを打算的な目で見られている気  
がした……あの人気がいたらきっと心の底から喜んでくれたんだろう  
な……。

「やめよ、朝から……。」

「ひつひつの夢を見たせいで嫌なことを思い出しちゃった。

「ああ、今日も一日頑張りやー。」

まあ、学園が始まるのは2日後だけどね。

ガチャ - -

ドアが開く音がしたから見てみると、そこにほわわわから姿の見え  
なかつたルームメイトがいた。

「おはようー、ナズナちゃんー！」

「おはよう。もひすだけどね。」

「えつ、つやー！」

わたしは慌てて時計を確認した。

「ホントだ！ も～何で起こしてくれなかつたのお母さんー。いや、誰がお母さん？」

-----

わたしは北地区にある「オルディンの武具屋」に向かつた。

「バタン！」

「おはよーお爺さん！」

「つるせえぞ赤頭！ ～もつと静かに入れ！ ～それから世間ではすでに『『にんにちは』だボケ！』

この、王都では珍しい着流しを着たお爺さんは《杖師》のオルディンさん、アトランドの知る人ぞ知る名物職人――

「誰が名物だ！ ！」

「もとい名職人

「つたく、久しぶりに顔を合わせたと思つたら……それに若いくせにこんな時間まで寝やがつて……」

「そ、そんなことないですよ……？」

「その『～』は何だ？……つたぐ、寝癖ぐらに直してからこ。」

「オルティンさんは羨望の眼差しでわたしの赤い髪の毛を見ている。  
「何適当な」と言つてんだ！…呆れてんだよクソガキ！…」

「そんなことよりオルティンさんは、頼んでいた《杖》は？」

「！」のり～～～～たぐ！ ちょっと待つてろ！」

やつ言つとオルティンさんはカウンターの奥へ入つて行つた。

「！」で《杖》について説明すると、《杖》とは魔術師が魔法を使用する時に使う道具の総称のことだ、昔は全て杖を使用してたらその名残らしい。

今では、魔術師個人によつて使用する《杖》は異なり、人によつては剣や盾を《杖》として使用している場合もある。」

「…で、誰に説明してんだ？」

「いつの間にかオルティンさんは戻つて来ていた。

「いや、退屈だつたからつい。」

「……とにかく、ほらー。オマハさんの注文通りの仕上がりだ。」

そう言いながら、オルティンさんは木製の長杖を手渡してくれた。

「柳の枝を削つて作った一品だ。クセはあるが、まあオマエさんなら大丈夫だろう。」

「あつがとつー。」

「 なあに、構わんさ。今年からギルドでクエストを受けるんだろう？ また何か必要になつたら何時でも注文しにこい。 前払いしか受け無いけどな。」

「うん！ それじゃ！」

「オウ！」

わたしはオルティンさんに別れを告げて店を出

「あ、その前に」

した。——の直前で、さつそく新しい『杖』で風魔法を使って寝癖をなお

「…もつとマシな使い方をしろよ。」

わたしが上機嫌で店を出ると - -

- - - - -

「これはこれは、ルミールさんではないですか。」

突然ギザつたらしい口調の青年が話しかけてきた。

「……何か用かしら？」

こいつはシムジウ・ハング、名前から解るようにハング村の出身で、ついでに村長の孫だ。

「いえいえ、偶然見かけたので挨拶を思いましてね。」

シムジウは不愉快な声で続けてきた。

「どうも」機嫌がよろしいようですね？」

あんたに声をかけられるまではね……

「貴方には関係ないでしょ？」

わたしは冷たく、そう言った。

「おや、その長杖は？ まさかとは思いますが、またあんな小汚い老人の店で購入したのですか？」

「それがどうかしたのかしら？ オルティンさんはとても腕のいい職人よ。」

「冗談でしょ？？」の僕の依頼を断るような老人ですよ？」

「あいにぐ、オルティンさんは客を選ぶのよ。」

「ふん、」Jの天才の僕以上にふさわしい客がドコにいると言つんだい？」

誰が天才なんだか……3年前に学園に受かる前は散々わたしのことを見物と罵つていた癖に。

「たくさんいるわよ。……それに貴方以上の実力を持っている人はもつといるわ。」

実際にこいつは学年で中堅程度の実力だし、そのつえ今年から高等部になるから人数は倍近くになるというのに。

「つそんなもの！僕の才能が田覚めるまでの間だけだ！」

なにそれ？新しいギャグのつもりかしら？

「……コホン、失礼しました……どうですか？お詫びにこれから一緒に食事でも。」

「遠慮しておくわ、わざと食べたばかりだから。」

「そうですか。それもそうですね、もう4・30ですしね。」

「それじゃあさよなら。」

わたしはそう言い放つてその場を後にした。

……というかもう4・30だったんだ。朝も昼も食べてないからお腹すいた。

「…………しようかな。」

わたしは「喫茶アルバトロス」と書かれた扉を開けようとしたら

『あれ！君達魔法学園の生徒なの！？』

（…………今の声は）

『もちろん！ 明後日から高等部の2年になるのよ。』

踵を返してその場を立ち去った。

うん、別の店に行こう。

…………

「…………た、食べ過ぎた。」

わたしは眩ながらゲートに向かった。

起動まで、あと少し。

あの後近くの食堂で遅めの朝食兼昼食を食べた。あの自称天才との

会話のせいでストレスがたまつてたからヤケ食いしてしまった。  
体重は……大丈夫だよね？ 朝は食べてなかつたし。

そんなことを考えて、いのちにゲート着いたら - -

「もう少し詰めてください！」

「今まさにゲートが起動しそうになつていた。つてヤバイ！

わたしは慌てて魔法陣に駆け込んだ、途中で何かを踏んだり、長杖  
が誰かにぶつかった

「いでつーてめえ何ひとの足踏んでんだー！」 「ちょっとーあんた今  
私のお尻触つたでしょーー！」

ヤバイ、大事になつてる……

わたしは気まずくなり田をそらした。

その時ふと、西地区行きの魔法陣が田に入つた。

「 - - - - -」

あの灰色の髪の毛は - -

「ゼノーーー！」

わたしは咄嗟に叫んだ。けど…

「それでは…ゲート起動ーー！」

その後魔法陣が淡く光り、一瞬で東地区に移動していた。

「警備員さん……」の人痴漢です……」「なつ……だから違う……」「つるさいわね……犯人は皆そう言つたよ……」「さつきからうつせえぞそこのババア……心配しなくてもめえを触るゲテモノ好きなんざ居ねえよ……」「何ですつて……」

見間違えだつたのかしら?……でも、もしかしたら……。

それはともかく……

「い」めんなさい。わたしの長杖が当たつちゃつたみたいで……

とりあえず誤解を解いておこう。

- - - - -

「はあ……。」

その後、次のゲート起動で西地区に行き、1時間近く探し回つたけど結局見つからなかつた……。

「はあ……。」

わたしはもう一度ため息を吐いた。

やつぱり見間違えだつたんだ…。

わたしは寮に帰り、部屋のドアを開けた。

「お帰つカラチャーン…むへ、遅いから心配したよ～～～！」

わたしはナズナちゃんに謝つてからベッドに倒れこんだ。

今日は疲れた。

## 6話 Another side (後編)

6話にしてやつヒロインをだせました。

せんせん帰れしないか……

## 7話 擦れ違い

↓ side・ゼノ↓

れて、今日の予定はと…

「どうあえず西地区は学園が始まつてから行けばいいか。」

よしー今日は王都の冒険者ギルドに行こうー。

↓ side・サンドラー

今日はちゃんと午前中に起きた。

そういうふうに、休暇中にギルドに登録するように言われたつづけ。

よしー今日はギルドに行こうー。

「ねえ、ナズナちゃんはもうギルドに登録した?」

「え、そういうふうに忘れてた。」

「じゃあこれから一緒にいく?」

- - - - -

第一魔法学園の学生寮は十階建ての建物であり、入つて右側が男子で左側が女子に別れている。

また、2～4階が中等部、5～10階が高等部となつていて

ちなみに学生寮は全部で5つあり、それぞれ五大属性の名前を一つずつとつて呼ばれている。

～30分後・『火の学生寮』一階ロビー

「ミコアのやつ遅いな…」

すると、女子部屋の方から

「あら～えつとおはよひざわこます。」

ナズナが降りてきて、ロビーにいたゼノに挨拶した。

「あ、どうもおはよひざわこます。」

「あの、新しい管理人の方ですか？」

と、ナズナはゼノに質問した。

「え？いや、一応生徒ですけど…。」

「わうなんですか？すいません、制服を着ていなかつたからつ…。

」

現在のゼノの服装は、じく一般的の冒険者が着る魔物の皮製の茶色いズボンと布の赤いシャツの上に黒いレザージャケットを羽織つたものである。

対して、ナズナは学園の制服である。

「やっぱり制服を着ていないと不味いですか？」

「いえ、そういうわけではないですよ。」

と、それへ

「じめーんーまつた？ゼ…お兄ちゃんー…

ミコアが降りてきた。もちろん制服姿で。

「お兄ちゃん、どう？あたしの制服

「ん？ああ、よく似合つてる♪。」

「えへへ　とにかく、お兄ちゃんは制服着ないの？」

「せうだな…ちょっとくら着替えてくるわ。えっと、それじゃあ失礼します。」

セツニツトヤノは階段を上つていった。

「あの、おはよいりやこます。」

ミリ亞はナズナに挨拶をした。

「おはよいりやこます。貴女は?」

「はーーーはじめまして、今年から中等部の一年になるミリ亞・アルフレインといいます。」

「セツカ入学組なんだ。はじめまして、私は高等部の一年でナズナ・イスルギっていうの、よろしくねミリ亞ちゃん。」

「ひがらこ宜しくお願いしますナズナ先輩。」  
(あれ?イスルギってどこかで聞いたような?)

もううんヤツのことである。

「といふで、入学組つて何ですか?」

「入学組つてこのはミリ亞ちゃんみたいに、中等部の一年から学園に通つている人のことよ。ちなみにそれ以降に学園に通つてている人は編入組と呼ばれているわ。高等部から通つ人もそうね。」

「ナズナ先輩はどうち何ですか?」

「私は中等部の一年からだから編入組よ。」

と二人が話し合っている内に

「ごめーんナズナちゃん！お待たせ！」

カンドリが階段を降りてきた。

「もう遅いよサラちゃん」

「おんねー 鞠下が見たらなくで……あら? その子は?」

「Jの子は新入生のミリアセちゃんよ」

「へえ、新入生なんだ。わたしはサンデラ・リール、ナズナちゃんのルームメイトよ。気軽にサリって呼んでね。よむじへリコアちゃん！」

「さあよろしくお願ひしますサラ先輩。」

「ねえ、もしよかつたら一緒に来る？王都を案内してあげようか？」

とサラは提案したが

「すいません、実は今日は寄るとい」がありまして…それに兄もいましたし。

「そつかあ残念。それじゃまたねミリアちゃん」

そう言つと一人は寮を出ていった。

タツタツタツ

「お待たせ！ごめんごめん、ベルトが見つからなくて！」

「遅いよゼノにい、早く行け。」

遅れること5分、ようやく一人も寮を出た。

- - - - -

「ナズナちゃん！あと1分しかない、急いで！」

「もつ、サウチャyanが遅れるからー。」

二人がゲートに着くと同時に

「それでは、ゲート起動！」

魔法陣が淡く光だして転移魔法が起動した。

一方、

「ゼノにい、あと一分しかないよ。」

「仕方無い、次の起動時間までその辺の食堂で朝飯食べてようか。」

-----

所変わつて、冒険者ギルド

冒険者ギルドとは、大国アトモス、東国、そして西にある聖皇公国の三ヶ国に支部が点在する「国境の無い冒険者組織」のことである。

閑話休題

「着いた！」

「いつ見ても大きな建物だよね。入るのはじめてだけだ。」

サラとナズナの目の前には、石造りの建物があつた。

高いは4階程度だが一階辺りの面積は、他の建物の2・5倍ほどあ

る。

入口にある「剣と長杖を交差した標識」が冒険者ギルドの紋章である。

二人が入ると、中は騒音が響いていて女性職員が慌てて駆け寄ってきた。

「どうしたの君達？まだ学生でしょ？」

「？ 今年から高等部になるので登録しに来たんですけど。」

すると職員は困ったように「…

「じゃあ、とりあえず」うちに来て。」

一人を階段の方へ促した。

階段を上る前にサラがチラリと1階を見てみると、1階は酒場になっていた

一行は2階の受注所にやって来た。ちなみに3階は資料部屋、4階は関係者以外立ち入り禁止となっている。

そのまま奥にあるテーブル席に着くと、先ほどの職員が口を開いた。

「「めんね、今下の酒場でパーティー間で言い争いになつていると  
こりなのよ。」

「なるほど…」

「じゃあ、担当者を呼んでくるからちょっとまつててね。」

そう告げると職員は受付けの奥に歩いて行った。

サラが周りを見渡してみると、近くのテーブルで学園の制服を着た男の子が別の職員に何かが書かれた紙を手渡しているのが目に入った。

そのうち、メガネをかけた男性職員がやって來た。

「お待たせしました。それではこちらの紙に必要事項をお書きください。」

そう言って一人に一枚ずつ紙を手渡した。

紙には名前、適正属性、《杖》の種類などの項目が書かれていた。

「あ、あの質問しても良いですか？」

記入しながらナズナが控えめにきいた

「名前はわかるんですけど、なぜ適正属性や《杖》の種類を書く必要があるんですか？」

「ああ、それは冒険者どうしがパーティを組むときの用意になるし、何より成り済まし防止の意味があるんですよ。」

「成り済まし……ですか？」

「ええ、極希にそういうことをする迷惑な冒険者がいるんですよ。

「

と職員は答えた。

それから暫くして

「よし、書けた！ナズナちゃんは？」

「うん、私も今書けた所。」

「それではお預かり致します。ギルドカードの作製には少し時間がかかりますので」「承ぐださーい。」

「わかりました。」

「それじゃ、上の資料室で時間を潰してよーつか。」

そつまつて一人は階段を登つて行つた。

その頃一階では、

「！」のクソガキー覚悟はできんだらうな……！」

灰色の髪の毛の少年が酔っ払いに絡まれていた。

「どうじていつなつた……。」

少年は何の面白味もないテンプレなセリフを呟いた。

7話 擦れ違い（後書き）

「意見、」感想をお待ちしております。

話は少し前にさかのほる

「side・ゼノ」

朝食を食べ終えたからゲートを使って北地区にやって来た。

「やういえはゼノにい、ギルドに向いて行くの。」

「昨日門番のおじさんと高等部は授業の一環としてギルドでクエストを受けるって言つてただろ？だからどんなのがあるか確認しておきたくてね。」

「ふーん。」

「それよりリアは何処か行きたい所でもあるのか？」

「あたしは武器屋に行きたいな。」

「新しい《杖》でも買つのか？」

「うん。さすがにいつまでもこれは……ね。」

やつ言いながらコアは腰に携えている物を指差した。

たしかに学園でそんな物使っていたら『自分田舎者ですよ』と大声

で叫ぶようなもんだしな。

「よし！ それじゃ先に武器屋に寄つてみるか！」

「いいの？」

「ま、可愛い妹のためだしな。」

「そんな！ 可愛いだなんて……えへへ……でも『妹』としてか  
……。」

ミリアは顔を赤くしたと思ったら、今度は何かを咳きながら俯いた。

「どうした？ 風邪でもひいたのか？」

「大丈夫……ちょっと複雑な心境になつてているだけだから……。」

「どうか？無理するなよ。」

さてと、昨日スズカ先輩に教えてもらつた武器屋はと…。

「なんか期待はずれだつたね。」

「だな。」

武器屋で扱っていた武器は、ほとんどが量産品のナマクラばかりだった。

「どうあるかと近くにあるのばかりの怪しげな店しかないぞ。」

看板には掠れた文字で「オルティーンの武器屋」と書かれていた。

「うへん、どうしようかな？」

やつぱり躊躇するよな。

「ダメモトで行ってみる。」

「わかった。」

-----

ギギギギギギ……

「……扉の立て付け悪いな……」

俺は思わず呟いた。

「でもゼノにい、売つてゐる物それつも良からぬだよ。」

見てみると、地味だが丈夫そうな武器や防具が並んでいた。

「ほひ、よくわかつてゐるじやねえかお嬢ちゃん！」

奥から飛むくじやひなお嬢さんが出てきた。

「氣に入った物はあつたか？」

「やうですね……できるだけ軽くて丈夫な剣はありますか？」

お嬢さんがしゃべりかけてきたからニアが質問した。

「あん？ レイピアじや駄目なのか？」

「突くための剣じやなくて切るための剣が欲しいんです。」

ニアはおじさん、いや父さん直伝の剣術を使つからな。

「《杖》用の武器か？」

「はい。」

「じゃあ今使つてる《杖》を見せてみる。」

「えーえっと…あの…これです。」

ニアは恥ずかしそうに自分の《杖》をカウンターに置いた。さつきの店で見せた時は店員に変な眼で見られたからな…

「鉈とは変わつたもん使つてるな。」

ミコアは腕力がなく普通の剣では重すぎるため鉈（薪割り用）を使つてゐる。

「つーむ、なるほどな…」

お爺さんは鉈を一通り観察して、口を開いた。

「おし！ 気に入つた！ お嬢けやん、《杖師》の名に賭けてオマエさんにピッタリな《杖》を打つてやるー。」

「ホントですか！？」

「《杖》の手入れが行き届いてるからな。逆にワシは《杖》をだいじこしない奴には売らんがな。」

ずいぶん職人気質なお爺さんだな…

「それとそここのボウズは何か買つのか？」

「え？ いえ特にね」

「とりあえず《杖》を見せてみろ。」

仕方ないな…

俺はポケットにある物を取り出した。

「あ？ 何だこりや？」

「何つて、ただの金属片と植物の種ですけど何か？」

お爺さんは俺が取り出したガラクタを陶酔しきつた表情で「じとじらんわ！！最近のガキはみんなこうかーー！」

「まあ、俺の「じとじらん」ですよ。それより妹の『杖』はこいつ頃でありますか？」

「…まあ材料はそろいつるし、せこばこ2日ぐらいで出来上がる。他に注文も無いしな。

ただ、まだお嬢ちゃんは正式に注文したわけではないがな。」

「わかりました。どいつかぬココア？」

「あたしはお願いしたい。」

「じゅあせうこつ」と。「わかった。ちなみに料金は…今回は初回だから後払いでかまわん。」

普段は前払いなんだ…

「じゅあ、俺はギルドに行くナビゲーション？」

「あたしはもう少しして商品眺めてるよ。」

「わかった、後で迎えに来るよ。」

そう言って俺は外へ出た。

それについて、アクセサリーより武具に興味津々な妹つて……お兄ちゃんは心配だ。

「……『テッケー』

これが王都のギルドの第一印象

「（）なんにテカイの建てる必要ないだろ…。」

「まあいいや中にはこい」

扉を開けたら女性職員が近づいてきた

「えっと、薬学園の子よね？登録に来たの？」

「いえ、ギルドカードならすでに持っています。ただ王都に来たのははじめてなのでクエストを確認しようかと」

「あら、わうなの？」

何か疑われてる？

「確認をせてもうらえる？」

「……それは義務ですか？」

「一応ね。でもそんなに警戒しなくても大丈夫よ。守秘義務があるから。」

必要以上に見せたくないんだがどな。

「わかりました。『さうさ』

俺はカードを職員に見せた。

「どれどれ？ - - - ちょっとこれムグッ

俺は慌てて職員の口を塞いだ

「守秘義務は！？」

「ブハッ、『』、『めんなさい。』

うわ、手がベトベトだ。

「それにしても噂の『牙折り』に会えるとわね。」

「……あんまりそのままでは呼ばないでくれません？」

そつ言いながら俺は職員の服で手を拭つた。

「タオル渡すからやめてちょうどいい！」

職員がタオルを取りに行つた

- - その時

ドン -

職員が学園の制服を着た知らない男の子とぶつかった。

そしてそのまま男の子は言い争いをしていた冒険者達にぶつか  
る瞬間にその内の一人が偶然振り上げた腕にぶつ飛ばされて側に居  
たソロの酔っ払い冒険者にぶつかって、そのままその場に崩れ落ち  
た。

……いや、何これ？

「だから何度も言つて、ん？ああ！君、大丈夫かい！…」

喧嘩をしていた冒険者達は男の子を介抱しました。

職員は、いつの間にか居なくなつてやがる。

「おい！イテえだらうがガキ！…」

酔っ払いが俺に向かつて叫んでいる。

いや俺！…？

「いや俺は関係ないでしょ！…？」

「惚けてんじやねえぞ！制服着てるじやねえか！」

ちなみにさつきの男の子は冒険者に囲まれて、酔っ払いの死角にい  
る。

「この酔つ払い…服装じゃなくて顔を覚えるよ

「EJのクソガキ…覚悟はできんだらうな…」

「どうしてこうなった…。」

あれか?俺が職員の服で手拭いたのがいけなかつたのか?

「ちょっと落ち着いたらどうですか?」

「黙りやがれ!ぶつ殺す!…」

そう言つて酔つ払いは剣を抜いてきた…

「…抜いたな?」

その瞬間、俺は表情を消した。

↓ side・サンデーラー

そろそろカードもできたかしら?

「カラカラさん、そろそろ床わづ。」

どうやらナズナちゃんもやつ思つたようだ。

「やつね、行こいつ。」

『タオル渡すからやめてちょうどいい。』

途中、下から何か聞こえたけど無視した。

「ああ君達、ちょっとビカードができましたよ。」

2階に戻つたらさつきの男性職員がそう告げた。

「こひらがギルドカードになります。」

カードには名前とギルドレベル、そしてよくわらない項目の三つが書いてあった。

「カードについて説明致します。まずギルドレベルになりますが、こちらは受注可能なクエストの最大難易度になります。簡単にいえばこのレベル以下のクエストしか受けられることができません。レベルを上げるにはある程度クエストをこなして頂くと、特別クエストが受注可能になり、それをクリアすればレベルアップになります。また、レベルは低い方から1～10となつておりますが6以上になるには学園卒業が義務付けられています。

次にクラスの説明にまいります。クラスとは今現在使用している『杖』やその他武器によって呼ばれる名称のことです。

『杖』を変更した場合、クラスも変わりますのでご報告して下さい。ここまでに何か質問はござりますか。』

「バナナはオヤツに入「それではまたのおこしを!」

職員はわたしのボケを無視して奥に引っ込んでいった。

「じゃ、帰らつか。」

「やうだね。」

その時 - -

バギイイイイイ

「何ー? 今  
の音ー?」

ナズナちゃんが狼狽える

「下からだわーー!」

わたしは急いで階段を駆け降りた。

一階では、尻餅をつきながら刀身が折れた剣を持つた顔の赤い冒険者を

灰色の髪の少年が見下ろしていた。

あれは - -

「ゼノ……？」

わたしは無意識にそう呟いていた。

「さて、それじゃあ説明してもらおうかガキ共！」

場所はオルティンの武具屋、その店主の目の前に男女二人が正座をしていた。

「いや、あのですね・・・」

サラが驚いたなく口を開いた。

先ほどギルドの酒場でひと騒動起こしたゼノは、

（やべつ・気まずい・）

そそくかとその場を後にした。もちろん階段付近にいるサラには気が付いていない。

一方、サラはしばらく思考停止した後

（はつ・じつしてる場合じゃない！・・・）

我に返り、急いで後を追いかけた。

ついでにナズナは

（さつきの人は、今朝会ったミリアちゃんのお兄さん？…………って、サラちゃんがいつの間にかいない！・・・）

・・置いてかれた。

（クエスト確認出来なかつた。まあいいや。）

そしてゼノはミリアを迎えてオルティンの武具屋の扉に手をかけて

「ゼノ――――――――――――――――――――

「ん？ ブベウフ――――」

直後サラの特攻によつてそのまま扉を破壊して店内になだれ込んだ。

「まつてよサラちやーん――！」

ついでにナズナ到着。

「・・・とこつわけでして…。」

「どうあえず、赤頭。オマハは向回つりの扉を壊す氣だ。」

オルティンは静に、それでいて物凄いプレッシャーをこめて言った。

「月一のペースでぶつ壊しやがつて。あれか?扉に怨みでもあるのか?それともワシに対する嫌がらせか?」

「いえ、そんな!滅相も御座いません!」

「それから、そこの若白髪」

「若白髪!?」

オルティンは今度はゼノに向き直つて喋りだした。

「オマエがもつと遅めに歩いていたらつづの扉は無事だつたんじゃねえか?」

「ちよつと待つてください!…そんな無茶苦茶な!…・・白じゅわな  
くて灰色です!…生まれつきの!…」

ブチッ!!

「そつちじゅつつつつつつ!…ねえええええだ!…うおおお  
おおおおがああああああアアアアアアアアアアアア!…」

オルティンはキレた。

ちなみにその他一人はすみつこで震えていました。

（五分後）

「で？結局何でオマエはそこガキにタックルをブチカマしたんだ？」

「？」

「えっと、その五年ぶりだからつい…。」

「じゃあボウズ、オマエは何でお嬢ちゃんに背を向けてたんだ？」

「なんていうか……考え方をしていて気付きました。」

オルティンはため息をついた。

「どうあえず、今日はもう閉店だ。後はテメエらでかつてにじる。」

そして一行は寮に戻つて行つた。

「……さてと、さつさと扉を直して『杖』を作らねえとな。」

-----

「じゃあ、あらためて自己紹介から。私はナズナ・イスルギ、よろしくね。」

「あたしは//リア・アルフレインです。よろしくお願ひします。」

卷之三

「ほら、お兄ちゃんも自己紹介して。」

「いやその前に何で俺の部屋に集まつてんだ?」

一 だつてお兄ちゃんは女子部屋に入れないでしょ？」

それが口では語るのではなく、心で

ここでサラが徐に口を開いた。

あのさ セレッソで話したいんだけど……一人共にしかな?

- 89 -

「.....」  
聞いてもいい?

「……ああ。」

サラは深呼吸して、ゼノに問いかけた。

「あの時約束は……」「ごめん……」

ゼノは質問を遮つて喋りだした。

「結局、剣士になくなれなかつた……」

「……やい。」

サリマ静に立ち上がり、そのまま部屋を出でこつた。

「ちよつとまつてよサリちゃん」

ナズナが後を追いかけた。

「ゼノ」「……」

「……仕方なこ。あの時の約束を破つた俺が悪い。」

「でもー。」

「それitar、正直じひやつて接すればいいか解らんないんだ……」

ミコトにはそれ以上何も言えなかつた。

「サリちゃんー。わのせ酷す。やるよー。すつと会つたかった相手なんでした。」

ナズナの問いに對してサラは

「……う……うう」

「え？」

「どうしよう……話したいことがホントはイッパイあるのに……あでもござとなると緊張して会話が続かないし！」

「……えーっと、怒つてたんじゃ無いの？」

「やつじやないの……まつたくショックを受けなかつたと言えば嘘になるけど……でも……」

サラは半狂乱になりながら喚いている

「さつもので嫌われて無いかな！ねえ！」

「……ドウダロウネ」

その後、ナズナがサラを落ち着かせるのに四時間かかった。

9話 再会と…（後書き）

次回からひよみやく学園生活がスタートする予定です。

自分の文才の無さが怨めしい…

## 10話 一人の不安（前書き）

はじめに謝つておきます。  
結局今回は、学園開始直前で終わります。  
どうもすみません。

## 10話 一人の不安

side・ゼノ

朝か……。

今日から学園生活が始まるのと気が重い。

「まあ仕方ないか……」

そう騒いでから部屋を見渡してみた。すると、

「あ、おはようございます……。」

知らない男の子が居た

「曲者――――――。」

「ええつ――。」

とつあえず、叫んでみた。

「で、君はだれ?」

「いや、何で今叫んだの?」

「ムシャクシャしてやつた。誰でもよかつた。」

「「めん、意味が解らない。」

それで君は?もしかしてルームメイト?」

「それで君は?もしかしてルームメイト?」

「あ、うん。はじめまして、僕はマルク・マグリットといいます。」

「俺はゼノ・アルフレイン、よろしく。」

俺は先ほどから疑問に思っていることを聞いた。

「ところで、学園開始当日に入寮なんて珍しいね。」

「あー、実は昨日王都に着いてさ。そのままガルドに登録しに行つたらちょっと事故にあって、深夜まで北地区の宿に寝かされてたんだ。」

「ん？ それって……

「もしかして、職員とぶつかった後に冒険者に偶然殴られたりした？」

「……よくわかったね。」

「そりゃあ

「現場にいたからね。」

昨日、ガルドにいたあの子だったとは……笑うしかないな。

「……まあ、まあこれからよろしく……」

「ああ、じゅうじゅう。」

「じゃあ僕はもう行くよ、また後で。」

マルクはそのまま学園に向かつて行った。  
俺も準備するか……

- - - - -

一階に降りたら偶然サラとナズナに会つた

「あ、…………ねはよつ

「ねはよつ、えつと、あの…………じゃあわたし急いでるからー。」

やつまつてサラは行ってしまった。

「ちゅうとーーサラちゃんー……行つちやつた。」

俺はナズナに聞いてみた。

「いや、違うんじやないかな？」

「いや、違うんじやないかな……」

もしかして気を使わせたかな？

「それより、早く行かないとい！」

それもそつか……

俺達は学園に向かって歩き出した。

side out

ゼノとナズナはそのままなんとなく並んで歩いていた。

「あのせ、聞いていいかな？」

沈黙に耐えられずナズナが質問した。

「その、何で剣士になるのを諦めたの？」

サラのルームメイトであり親友でもあるナズナはじつは以前、ハング村時代のゼノの話をサラから聞いていた。といふか何度も聞かされていた。

だからこそ疑問に思っていた。

（サラちゃんの話を聞いた感じだと、簡単に諦めるような人じゃないと思うんだけど……）

「……結論から言つたら才能がなかつたからかな。」

「どういふこと?」

「十歳のときに今の父さんに引き取られてすぐに剣術を習つたんだ」

「それで？」

「3日目の夕方に言われたよ、『オマエ驚くほど才能無いな……』って、しかも笑顔で。」

「でもそれだけで……」

「もちろん俺もそれだけじゃ諦めなかつた。来る日も来る日も剣を振つた。朝から晩まで振り続けた。」

そして、父さんは来る日も来る日も『全然進歩しないな！』とか『ここまで見込み無いと逆に笑えるな！』とか言って爆笑し続けた。本人に悪気は無かつたけどそのたびに母さんにぶつ飛ばされてた。」

「……」

「1日も休まず剣を振り続けたから、その甲斐あつて体力と筋力だけは順調についていたよ。そして、半年が経過した。ある日、俺の訓練を見ていた妹が父さんに『あたしもゼノにいといつしょにしゅぎょうしたい』と言つた。」

「…………それから？」

ナズナは嫌な予感しかしなかつたがそれでも聞いた。

「10日で剣技を追い抜かされた。さすがにショックでそれ以来、剣術は諦めたよ。ちなみにミリアは当時8歳だつたつ。」

「……軽々しく偉そつな」と叫んで本当にみんなを。」

（カラちゃん、ゼノくんは根気よく頑張ってたみたいだよ……悲しいべつに。）

「まあ、昔のことだしもつ吹つ切れただけじね。ただ、やつぱり約束を破つたのは心残りではあつたよ。…………結局共破ることになつちやつたけど。」

「えつへ。」

「『剣士になる』と『余ごとき』、どうもできなかつたけどね。」

「

「それは再会出来たんだから約束は果たしたんじや……」

「今思えばさ、もつと早く会つに行けたんだ。でも出来なかつた」

「どうして？」

「感かつたんだ。約束を破つたことで拒絕されるんじやないかつて思つと。」

ゼノは苦笑しながらそつ答えた。

（ゼノくんはどんな心境で自分のことを話してくれたんだろ？  
今まさに（本當に）カラちゃんから拒絶されてる状態なの  
だ。）

結局それ以上、二人の会話は続かなかった。

- - - - -

～s.i.p.e.・ナリ～

はあ～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

やつてしまつた。どうしても面と向かつて話しが出来ない

「はあ～～

「おはよアリガトササ。

振り返つてみると//コアちゃんがいた。

「おはよウリ。……」

「少しお話してもこいですか？」

「うそ、こよ。」

「#の兄ちゃんにこいつ話を聞きたくて

「何でまた急げ。」

「これ、確認しておきたくて。」

よくわからないけど、何か考えがあるみたい。

「昔のゼノは……常に自分以外のことを考えて行動する子だったんだ。」

わたしは記憶を探る。

「ハング村では、その年に五歳になる村の子供達を集めて全員の適正属性を調べるんだけど……わたし達の年ではとても騒がれたわ。正確に言えばわたしとゼノの結果がね。」

当時五歳になつたばかりだつたつけ。

「わたしの適正属性は3つあつた、これはハング村では異例のことだつたの。  
対してゼノの場合、ハング村どころか歴史上でも異例中の異例だつたわ。」

「それは知つてます。お兄ちゃんには何故か適正属性が存在しないんですね。」

ゼノは誰よりも悪い結果だつたのに……それでもわたしを本氣で祝福してくれたつけ。

でも

「その日から周りの子供達はゼノのことを蔑んだわ。大人達はゼノに興味が無かつたのか、それを注意する人はいなかつた。」

今思い出しても腹がたつ。ゼノは何も悪いことなんてしてないのに。

「でもゼノは自分を馬鹿にされても何も言わなかつた。そのかわり泣き言を言つたことも無かつたわ、当時五歳の子供がよ。」

考えてみれば、ゼノが泣いているところなんて見たことないや。

「そのくせ七歳になつた頃、一人だけ基礎魔法が使えるようになつて、そのせいでわたしが苛められたときは真剣に怒つてくれたの。」

自分が辛かつたくせに

「…そんな感じだつたわ。」

「だつたら安心してください。」

ミコトちやんは続けた

「お兄ちやんは、ゼノにいは今も変わっていません。だから不安にならずにゼノにこと話あげて下さー。」

不安にならずに、か。

(少しがんばつてみよつ)

わたしあはそつ心の中で亥こいた。

## 11話 波乱のクラス分け（前書き）

更新が遅れました。

今回は、2話あります。

## 11話 波乱のクラス分け

学園の校門前には次々に生徒が集まり、教師がそれを誘導していた。

「中等部の生徒は左側、高等部の生徒は右側の校舎に向かってください！」

学園の敷地の総面積は西地区の4割を占めている、敷地の中央付近に2つの校舎が並んでいる。校舎の高さはどちらも4階建てとなつていて。

そして、その校舎を囲む様にさまざまな施設が敷地内にある。

「それから、入口で自分のクラスを確認してください！」

ついでに学園に通う生徒の人数について説明すると、まず中等部の1年生が200人、この200人が通称入学組と言われている。学園では1学年5クラスになつており、15歳未満の編入生は1クラス辺り5人、つまり25人ずつ2年生と3年生に加わることになる。よつて中等部から進級するのは250人である。

そして、15歳以上の編入生は全員高等部の1年生として加わるのだが、高等部では毎年クラス辺り50人、つまり250人が編入するため、最終的に一学年500人になるのである。

学園では、入学組以外の300人のことを編入組と呼称しているのである。

そしてマルク・マグリットもその内の一人であつた。

(はあ)、王都に着いてすぐ気絶したり、ルームメイトはちょっと  
変な人だつたり……ついてないな)

どうやら彼のゼノへの第一印象は「変な人」だつたようだ。  
第一声がアレなので無理もないが。

「次の人、名前は？」

「マルク・マグリットです。」

「えつと、マルク…あつた、Dクラスへどうぞ。」

そのままマルクは教室へ向かつた。

- - - - -

「繰り返します！中等部の生徒は左側、高等部の生徒は右側の校舎  
に向かつてください！」

「それにしても、王都の人は何でも大きくすればいいと思ってんの  
かな？」

「いや、人が多いからだと思うよ」

ゼノとナズナは結局あれから会話も無く学園に到着した。

「いや、それでも大きすぎだつて。学園は王立とか言つてゐるくせに

しつかり税金で運営されてるのに。」

ゼノは愚痴をこぼした。

「だいたい、お偉いさんは税金を無駄使いしすぎなんだよ……子供手当てなんかすぐに廃止するべきだ……」

「何の話!?」

「さあ?」

(……ゼノくんもサラちゃんみたいに突然ボケるんだ。)

ナズナの悩みの種が一つ増えた。

「次の人、名前は?」

「ゼノ・アルフレイン」

「ナズナ・イスルギです。」

「えーと、お約束どおり二人共のクラスよ。」

(……また増えた)

ナズナの気苦労は続く

「クラスに着いたら担任の指示に従つて席に着いてください。」

二人は教室に向かった。

一方、教室では。

「おやおや、『紅嵐』のルミールさんではないですか。」

サラは窓側の列の中程の席に座つて、外を眺めていた。

「どうやら貴女もロクラスのようですね。」

（不安にならずに、昔みたいに……）

サラは耳に入つてくる雑音を無視して今後のことを考えていた。

「それにしても、高等部からこんな大勢の編入組なんかと同じクラスに居なくてはならないとは…生糞の入学組である僕達にはふさわしく無いとは思わないかね。」

「用件が無いなら話しかけないでくれないかしら、シムジウ・ハング」

サラはいい加減ウザくなつたので、雑音の発生源をフルネームで拒絕した。

と、そこへ

「いた！よかつた、サラちゃんも同じクラスだつたんだ。」

ナズナが到着した。

「これで3年連続ね！」

と、一人が盛り上ったので

「ふん、編入組」ときが。」

シムジウはそう捨て台詞を吐いて席に戻つていった。

「何のアイツ！」

「気にしないでいいよ…。それより、ゼノくんも同じクラスだよー。」

それを聞いたサラは

「そうなんだ。（よしー）」

周りに見られないようにガツツポーズを決めた。

一方、そんなサラの気持ちに気付いていないゼノは

（どうやらサラも同じクラスみたいだな。）

「さてと、俺の席は……特に決まりもないし、廊下側の一番後ろでいいか。」

はからずもサラから遠くの席に座りついた。

その時 - -

「バカな！何故貴様がこの第一魔法学園にいるんだーーー！」

偶然目があつたシムジウが叫んだ。

「その灰色の髪、貴様は落ちこぼれのアルフレインだなーーー！」

周りの生徒が突然喚き出したシムジウと、その矛先が向いているゼノに交互に視線を向ける。

「いくら編入組でも貴様のような無能が学園に入れるはずがない！さては何か卑怯な手段でも使つたな！」

と、どんどんヒートアップして行くシムジウに対してもゼノは - -

(いや、誰にいつ?)

まったく彼のことを覚えていなかつた。

「てか、‘初対面’の相手にいつたい何なのあんた？」

考えてみたがまったく思い出せなかつたのでゼノは質問する「ひとこしたようだ。

「貴様ーまさかこの僕のことを覚えていないのか！？　このハング  
村の村長の息子の僕のことをして！」

そこまで言われてよつやくゼノは思い出した。

「ああーあの9歳までオネショしてた奴か！？」「なー？」

クラスの生徒達は爆笑した

「貴様————！」

シムジウゼノに殴りかかわりした、そこへ

「はーいー全員席に着きなさいー！」

担任がやつて来た。

「ほり、とつとと座つてー！」

『覚えていろ、このーー能無しがー。』

シムジウゼノに向かつて小声でそつ吐き捨てた。

↓ side・ナズナ↓

あ、危なかった！……先生の到着が少しでも遅かったら、きっとサラちゃんは彼に魔法を放つてた…。

『サラちゃん！落ち着いて！ゼノくんなり平氣だからー。』

『何なのアソッ！ゼノに何の恨みがあるつてのよー。』

『たしかに酷いけど今は堪えて！』

私だつてせりきのは許せないけど……でも何でゼノくんは平然としてるんだろう？

## 1-2話 驚動（前書き）

2話目です。  
短いですがどうぞ。

第一魔法学園では、新学期の初日と次の日は授業をせず、一日で渡つて生徒の能力測定を行つてゐる。

担任が来た後Dクラスは学園の施設の一つ、室内闘技場に移動していた。

「それじゃ、『杖』を持つて男女に別れて各自測定を行つてちょうだい。」

そう告げると担任は男子の方にやつて來た。

「あの、先生は女性ですね？」

「もちろん！だから女子の着替えを觀てても面白くないからこっちに覗きに来ちゃつた」

「いや『来ちゃつた』『じゃないでしょ』！しかも今日は着替えたりしませんからね！」

初田は制服のままで五感と魔力の測定が行われるだけである。

「何ですって！？ じゃあ先生のこの興奮はどうすればいいのよー。」

「知りません！」

担任（32歳・彼氏無し）はこの後10分間も粘つてよひよひと諦めた。

「お疲れマルク。」

「……………ありがと。」

ゼノは担任に10分もの間、たつた一人で対応していたルームメイトを労つた。

「そういえば、アルフ - -」

「ああ、ゼノでいいよ。」

「じゃあゼノ、その…さつるのは何だったの?」

「教室のやつ?別に大したことじゃないよ。昔住んでいた村でちよ  
つとね。」

ゼノは幼い頃のハング村での出来事をかいづまんで説明した。

「そんでもその俺が学園に編入したのが納得いかなかつたんだらう。」

「……………つて、ちよつと待つて! たつたそれだけのことで何で - -

ゼノの話を聞いたマルクは村の理不尽な行いを聞いて狼狽えた。  
その様子をみたゼノは優しい声でマルクに言い聞かせた。

「ありがとう。でも別にマルクが怒ることじゃないよ。 所詮昔  
のことだから。」

そのまま測定は進んで行き、残りが半分ぐらいになつた時に、それは起つた。

「それじゃあ、あとは自由解散ね！ 先生はこの後合口ノンに行かなければいけないの！」

それだけ告げると担任は一瞬で闘技場をあとにして、ゲートに向かつて走つていった。

（あの人よくクビにならないな。）

クラス全員の気持ちがこの時だけまとまつた。

「邪魔者は消えた！ さつきの続きといこうかアルフレイン！」

空氣の読めないシムジウが叫んだ。

「さつきの続き？ オマエが9歳まで「違うわ！」

「適正属性のない貴様が学園にいる何てありえない！ いつたいどんな方法を使つた！」

「普通に受験しただけだけど。」

実際は3回失敗したが、それは高等部から編入した生徒のほとんどに言えることである。

「惚けるな！ 貴様のようなクズが…」「いい加減にしなよ…」

叫んだのは先ほどから隣にいたマルクであった。

「さつきから聞いてみれば、全部キリの言いがかりじゃないか！  
ゼノに謝れよ！」

するとシムジウは率先をマルクに変えた。

「何だ貴様！？ 編入組ごときが入学組の僕に命令する気か！  
「ああそうだよ！ だいたい入学組だから何だって言うんだ！ 人  
として言つていいことと悪いことの区別も付かないのか！」

「 - - - - ! 黙れこのクズが！ - 」「うわっ！ - 」

シムジウはマルクを殴りつけた。

「編入組の分際で調子にのるからだ！」

その時 - - !

「おい、 てめえ今何した？」

静に、しかし凄まじい怒気をこめてゼノが口を開いた。

## 13話 決闘（前書き）

戦闘シーンが下手くそだと痛感した今日この頃……

ゼノとシムジウは闘技場の真ん中で向かい合っていた。

「ふんっ、 無能の癖にこの僕に楯突くとはね。」

「不愉快だ。 ベラベラ喋るな。」

ゼノは今怒っていた。

自分の為にマルクが殴られたことが我慢出来なかつたからだ。

「入学組と編入組の差を見せてやる！」

学園の一部の生徒の間では「入学組が編入組より優れている」という考えが流行つてゐる。

これは受験を勝ち抜いた入学組に対して、編入組は少くとも一回は受験に落ちてゐるからである。

「入学組と編入組の差？ 結局たつた三年間で縮まるぐらい大したこと無いものだつたな。」

「だがゼノはそれを一刀両断した。」

「貴様に思い知らせてやろつてー」の僕の - -

「前置きは要らない。先生の誰かが来る前にさつと終わらすぞ。」

シムジウは自分の《杖》であるロングソードを構えた。 対してゼ

ノは棒立ちのままだつた。

「貴様！《杖》ぐらい構えたらどうなんだ！」

「生憎だが俺は《杖》を持ってないんでな、そもそも基礎魔法を使つのに《杖》は必要ない。」

「ふん、落ちこぼれが、行くぞ！『ファイアボール』！」

シムジウのロングソードの切つ先から火球が飛び出した。

ゼノはそれをサイドステップでギリギリ避けた。

火球はそのまま闘技場の壁に当たり、当たつた箇所が熱で溶けていた。

「精々逃げ回ることだな！『ニアブレード』！」

今回は、《杖》を横に振るい風の刃を一度に二つ飛ばしてきた。

一つ目はやはりサイドステップでギリギリ避けるゼノ、しかし避けた先に更に二つ目の刃が飛んできた。

「おつと」

ゼノは身体を仰け反らして何とかこれも避けた。しかし、シムジウは既に火球を放つていた。

「水よ！」

ゼノは基礎魔法である大気中の水分を集める『水汲み』を使って、火球に水をかけたが、火球は一瞬スピードが遅くなるだけだった。しかし、おかげでゼノは体制を立て直して火球をかわした。

「はつ！どうだ、これが僕の魔法だ。どうした！避けるだけで精一杯か？」

シムジウは余裕な態度で魔法を放つていた。

～ side・ナズナ～

危ない！

さつきからゼノくんはほとんど魔法を使って無い、使ったとしても何の変哲もない基礎魔法だけで、しかもほとんど効果が無いみたい。

「カラちゃんー！」のままじやゼノくんが！

ゼノくんは飛んできたエアブレードをまたギリギリでかわした。あのエアブレードは闘技場の石壁を軽々切り裂くぐらいの切れ味なのに。

「ねえ、カラちゃん！」

「すごい、まさかこれほど……」

「カラちゃん？」

何だろう？ハングくんの魔法の威力なら中等部にいた同学年の子達なら知ってるはず？

現にこの場でもその威力に驚いているのは今年編入してきた子だけなのに。

「確かにハングくんの魔法はすごい威力だけど、今は感心してる場合じゃーーー！」

「違うわー！」

違う？

「アリスのはゼノの方よー。」

「どうこういふとー。」

side out

「 あんそろ解つただるひ無能！ これが才能のある者とない者の差だ！」

得意氣にシムジウは言い放つ  
しかし -

「いや解んねえな。」

ゼノは呆れたような口調でそう言った。  
「確かに俺には魔法の才能も剣術の才能も無かつたけど、 お前も  
そんなに才能ないぞ。」

「何だと？」

「攻撃力はそれなりにあるが……所詮それだけだ。  
「それは負け惜しみのつもりかー。」

「面倒してやるよ。」

ゼノは冷めた口調で告げた。

「基礎魔法さえ使えればお前の魔法は誰にでも防げる。」

「ほざくなー、『ファイアボール』！」

「まず一つ目の『火球』だが、熱量を高めることを意識しそぎたせいで炎が拡散している」

ゼノは右手を前に突き出して、樹の基礎魔法の『そよ風』を発動した。

「だから空気抵抗が強くなりスピードも出なければ、進行方向に対して斜めに風を当てるだけで逸らせる。」

宣言どおり火球は左方向に逸れていった。

「しかもその技、剣の切っ先からしか出ないみたいだから予測もしやすいしね。」

「バカな!? 無能!」ときがー 食らえー『ニアブレード』ー。  
「次にその『風刃』だが……」

ゼノはゆっくりと歩み寄りながら続けた。

「切れ味とスピードを特化させたせいで軽すぎた。これも『そよ風』で簡単に逸らせる。更にーー」

今度は地の基礎魔法の『石造り』で足下の土を石にして蹴り上げて風刃を迎撃した。

「刃の横腹はとても脆い」

シムジウは目の前の光景が信じられなかつた。  
「う、嘘だ！こんな……さつきまでかわすのがやつとだつたやつが  
！」

「ハハハ……あの程度の攻撃をか？  
というより気付いてなかつたみたいだな。俺が必要最低限の動きし  
かしてなかつたのを」

ゼノは先ほどの攻撃をわざと、全て紙一重、で回避していた。  
「で？ その自慢の才能とやらりはもう打ち止めかな？」

「黙れ、クソッ！……『炎よ！集いて我が敵を焼き尽くさせ バー  
ンフレイム』……」

シムジウは中級魔法の『炎球』を放つた。

「それも基礎魔法だけでいけるよ……」

ゼノはポケットから金属片と植物の種を取り出した

「『地よ』そして『水よ』」

『石造り』で空洞の石の玉を作りその中に金属片と水をいれた

「『雷よ』そして『樹よ』」

今度は金属片に『帶電』を使い、中の水を電気分解して、植物の種

を『発芽』させて蓋をした。

「最後に『火よ』、食らえ！」

そして植物の芽に『着火』をかけると同時にソレを迫り来る『炎球』にぶん投げた。

「そんな物で僕の『バーンフレイム』を防ぐつもりか！」「もちろんだ。」には俺が考えた唯一の攻撃魔法だ

そしてソレは『炎球』に呑み込まれ、そして爆発を起してた

「名前は……とりあえず『水素爆弾』とでも言つておくかな。」

そして爆発が起きたことで『炎球』の軌道がずれた。

「そ、そんな！ こんなのは何かの間違いだ！」

「ちなみに今の魔法は発動に時間がかかり過ぎだ。」

そしてゼノは遂にシムジウに近くにたどり着いた。

「で、これで終りか？」

「あ、あ……うわああああ！」

シムジウは錯乱しながらロングソードを振り下ろした。

「邪魔だ！」

ゼノはそう言つてロングソードを素手で、殴り碎いた、

「そのまま寝てろーー！」

そしてそのままシムジウを殴り飛ばして勝負が決った。

## 14話 約束の行方

「君達、何か言い訳はありますか?」

高等部校舎の生徒指導室でEクラスの担任のゲイリーは田の前で正座している一人に問いただした。

「じゃあ先ずは……貴女は自分の仕事をサボつて何してたんですか?」

問い合わせられたDクラスの担任のマオ・フェイは視線を右往左往させながら答えた。

「違うのよ!絶対に外せない用事があったのよ!」

「あんた合コンに行つてただけだろうが!」

ゲイリーはシャウトした。

「それから、新入生の君は何故決闘なんてしたんですか?」

問い合わせられたゼノは

「黙秘します。」

黙秘権行使した。

「……成績に響き「言い争いからヒートアップしました。」

黙秘権撤回

ゼノは包み隠さず話した。

「事情はわかりました。しかしやり過ぎだとは思わなかつたんですか。」

「でも、最終的には一発殴つただけじゃないですか。」

ゼノは反論したが、

「その前に彼の『杖』を壊したでしょう。それに君のその一発のせいで彼は医務室送りだよ。」

ゼノに殴り飛ばされて氣絶したシムジウは現在医務室で治療術をうけている。

「何よりあんな大勢の前で彼の魔法の欠点を暴露したのがよくない」  
ゲイリーは咎めるような口調で言った

「下手したら彼は立ち直れなくなる。」

しかし - -

「それがどうかしましたか?」

もつと大きな挫折を経験し続くたゼノにとつて魔法の欠点を暴露される程度、何でも無いことだつたため疑問にしかならなかつた。

「いいですか? 今後彼の魔法はアナタが実演した方法で無効化されてしまつ、そうしたら - -

「じゃあ魔法を改良すればいい話じゃないですか。」

「はあ〜...。どうやらこのまま話していくても無意味のようですね。...仕方ない、今日はもう帰つてけつこうです。」

「わかりました。失礼します。」

「アンタ(フェイ先生)は残つてください。」

- - - - -

みづやく指導室から解放されたゼノ

外は既に夕方になつておりゲートまでの道を紅く染め上げていた。

「やつ過ぎ……か。」

ゼノは誰にともなく呟いた。

そこへ

「ゼノー、ごめん、僕のせいだ」

顔を見るなり謝つてくるルームメイトがやつて來た。

「マルクの方こそ俺のせいで殴られたのに何で謝るんだ?」「でも僕が殴られたからゼノが怒つてくれたんだろ?だからごめん……それとありがとう」

マルクは謝罪とお礼を照れくさうにゼノに送った。

「……なあマルク」

「何だい?」

「……俺はやり過ぎだったか?」

ゼノは先ほどからゲイリーに言われたことが気になっていた。

「……何とも言えないかな。確かにやり過ぎな部分もある、

シムジウ  
彼は

プライドも『杖』も粉々に碎かれてもしかしたらもう立ち上がりえないかもしれないし……」

(……結局俺は『牙折り』のままなのか?)

「でも、それでも僕はキミに感謝しているよ。だからもう一度言うよ、ありがとう。」

「そつか……」

(少しあはれたんだろうか?)

二人はそのまま寮に向かつて歩き続けた。

- - - - -

一人が『火の学生寮』に着く頃には田は完全に沈み暗くなっていた。

「なんか……やたらと視線を感じたんだが。」

「既に噂になつてゐみたいだね。」

道中にある学生達は一人に視線を向けてヒソヒソ話し合つている

「まあ、学園開始の初日から決闘なんてしたからしょうがないか。」

ゼノが寮のロビーに着くと見覚えのある夕焼けよりも紅い髪の少女

がまっすぐ正面を向けていた。

「じゃあ僕は先に部屋に戻ってるよ。」

マルクは気を効かせてその場を離れた。

「ねえ、ゼノ」

サラは何かを決心した様子で話しかけた。

「よかつたら少し付き合つてくれる?」

寮の外に出た二人は人の歩みが少なくなった大通りを並んで歩いていた。

「それで、何の用?」

ゼノが聞くと

「そのや…… ま、まだちゃんと会話をしていないなーーって思ったから

「そつか… そうだね。昔はもっとたくさん会話をしたもんね」

「それでさ、聞きたいんだけど… ゼノは剣術を諦めた後どうして

たの？ ほら、さつき闘技場で剣を素手で碎いてたから氣になつてさ。

「あの後、さすがにショックで一週間程落ち込んでたら、父さんに

……あつ、伯父さんのことね。」

ゼノは昔を思い出しながら話し始めた

「父さんに、『何時まで落ち込んでるつもりだ馬鹿野郎！』って怒鳴られてさ、その後に『お前は不器用だから道具を扱うのに向いてない、だからオレがケンカの仕方を教えてやる！』って言われたんだ。」

「何かメチャクチャな人だね。」

「ホントにね。それからいろんな人に鍛えられ続けてたらある日、父さんの知り合いに『よかつたら俺が徒手格闘術を教えてやる』って言つてくれたから始めてみたんだ。」

「じゃあやつぱりゼノはあの時の約束を守つてくれたんだ。話を聞き終えたサラがそう呟いた。

「え？ でも俺は剣術を諦め……」

「わたし達が約束したのは、剣術家、じゃなくて、けんし、でしょ、だったら、拳士、でもいいじゃない？」

「でも『会いに来て』の方は……」

「さつきわたしがロビーで待つてたら会いに来てくれた！ サラは間髪入れずに言いきつた

「……ヘリクツじゃないかそれ？」

「だからどうしたの？」

あなたは約束を守ってくれたわ！  
わたしが断言してあげる！」

そう言つてサラは微笑んだ。

「・・・ふつ、はははは……」

ゼノもつられて笑つた。

こうして一人が交わした約束は五年間の時を経てはたされた。

## 14話 約束の行方（後書き）

次回からは更新ペースが遅くなるかもしだせんがよろしくお願いします。

## 15話 クエスト準備

新学期開始から4日が経過した。

ほとんどの高等部一年生にとって始めての冒険者ギルドへのクエストを翌日に控えたこの日、1-Dではペア決めが行われていた。

「それじゃあ、適当に好きな人とペアを作つてちよつだい。」

と担任のマオ・フェイ先生、現在32歳ペア無し（独身）が指示を出した。

「なんかバカにされたよつな……」

↓ side・サラ

ペア決めか、やつぱりこには無難にナズナちゃんと組もうかしら――

「ねえサラちゃん、ゼノくんとは組まないの？」

と思つてたらとんでもない」と言つてきたこの子――

「ちよつ……そんないきなり……」

「でもチャンスじゃない！」の前やつと顔を見て話せるようになつたんだから――」

そ、そんなこと言つたって……でも確かにこれはチャンスかも……

……?

「わ、わかったわ……」

わたしは深呼吸をして - -  
「ゼ」なあマルク！ペア組まないか？…………あれ？

……………びつせりぎゼノは近くの席にいたこの間の男の子とペアを組んだみたい…………

「…………ナズナちゃん…………ペアお願ひ…………」

「…………ごめん…………私のせい…………」

（ side out ）

40分後

「それじゃあ、みなさんペアは決まったわねー」

ちなみにこの第一魔法学園高等部は1学年500人で5クラス、つまり1クラスあたり100人もいるため、こういう時は非常に時間がかかるのである。

「じゃあ、ペア同士で明日と明後日は受注するクエストを話し合つていてちょうだい。」

と言つて教室を出でていこうとしたマオ、しかし途中で立ち止まり、「言い忘れたけど2日間で最低5つクエストをクリアしないと補習だから頑張つてね」

「爆弾を投下して去つて行つた。」

「「「「それだけんな——————!?!?」」」

クラスの大半の生徒がシャウトした。

「side・ゼノ」

「オイオイ…… 随分とまあ無茶苦茶言つたな。

「2日でクエスト5個で……」

「やつぱりゼノでも難しいの?」

とマルクが聞いてきた。

「誰でも難しいと思つぞ…… まず時間が足りないし……」

しかもほとんどの生徒が今回始めてクエストを受けるはず……

「まあいいや、それよりこれからギルドに行こうか。」

「え? 一年生は明日からじやないと受注出来ないんじやなかつた?」

「確認するだけさ、何を受けるか実際に見ておくほうがいいと思つ。」

「なるほど…… 一理あるか。」

けど、その前に - -

「おーい、サラー。」

「……えつ？」

何か惚けてなかつたか？

「これから、ギルドに寄りつかと思つんだけど……一緒に遊びだ。」

「！？……行く！もちろん行く！」

「お、おお……そんじゃあ、イスルギさんも誘つて4人で行くか。それに気になることも有るしな……」

（ side out ）

「じゃあ、さつそく行こう。」

「ちょっと待つて。」

とナズナが止めた。

「どうかした？ イスルギさん。」

「ナズナでいいよ。」

「じゃあナズナ！」

「（こきなり呼び捨て……）その、わざわざギルドまで行かなくとも学園の敷地内に学生用の出張所があるからコストの確認はそこで出来るよ。」

「え、マジで？」

ところへと一歩は学内にあるギルド出張所へ向かった。

「で？ 見た感じどうなの？」

クエストのリストに一通り目を通したのでサラがゼノに訪ねてきた

「アハうだな……」まず確認してハナダ、今回の課題はペアでクエスチョン5個、だよな?」「ええ、たしかそうよ。それがどうかした?」と、そこでゼノ少し考えた後に一同に告げた。

「よし！ そんじや明日は4人でクエストを受けよう！」

— 10 —

## 16話 クエスト前に

週末の一連休の一 日目早朝、ゼノ達4人ははさつそく寮のロビーに集まっていた。

「ねえゼノ……何もこんな時間に集まんなくても…ふあ～」  
とサラが欠伸をしながら訪ねた

現在日の出前、外はまだ薄暗い  
しかし -

「昨日確認したところ採取クエストの種類が少なかつたんだ。」  
とゼノは告げた。

「えつと、どういうこと?」  
「つまり取り合いになるってこと」  
「取り合い? でも採取クエストは常時受注可能の筈だけど?」  
今度はマルクが訪ねた

「確かにクエスト自体に制限はない…けど採取対象には数に限りがあるからね。」

「そつか学年で250組もペアがいるからすぐに無くなっちゃうのか!」

「さりに今回の課題に『複数のペアが協力してはいけない』なんてルールは無いから4人でこなせば少し楽になるってわけ。」

「そつか! それなら時間を短縮できるもんね!」

「でも何で採取にこだわるんですか？」  
ナズナが問いかける

「今回の課題はクエスト、5種類、ではなく、5個、つまり同じクエストでも可能、ここまでいいよね？」

ナズナは頷いた

「そうなると採取だつたら一回でノルマの一倍以上取れたらクエストを2個達成したことになるんだ。」

「あれ？ でも結局2チーム分採取しなくちゃいけないならメリットは少ないんじゃない？」

「いや、実はそうでも無いんだ。 例えば一人で採取に行つた場合、一人が限界まで採取するともう一人だけで魔物の対処をしなくちゃならないから大変なんだ。 でも四人いれば先頭と最後尾で一人ずつ対処が出来るから魔物と遭遇した時もやりやすくなる。 しかも運ぶ人も二人に増えるから袋に入れたりしてより多く運べるしね。」

「なるほど、確かに集めすぎると持ち運びが難しくなるもんね。」

「でも一番の理由は、さつき言つたように後半になると採取は難しくなる、だから何れ討伐クエストを受けないといけなくなるんだ： その時四人いたほうがやり易いってとこかな。」

「「「へえ～…。」」」

ゼノの説明を聞いた三人は関心しながら声をもらした。

……今の長つたらしの説明を読み飛ばした読者は何人いるやう……

### 閑話休題

（本当は他のペアの盗難防止の目的も有るけど、初クエストで不安にさせすぎるのも良くないか……）

ゼノは声に出わさうと思つた。

- - - - -

4人は日の出前に学内ギルド出張所（めんどいから次から学内支部で）へ到着した。

支部内にはやはりほとんど人がいなかつた。

が、一人の男が一行を確認した途端に走り寄つてきた。

「えつ、誰あの人？」

「！？ - あればまさか！？」

例によつてゼノだけは心当たりがあつた。

「おーい！もしかしてオマエ『牙』か！？」

近づいて来くるなりバスター・ソードを背負つた男がそう叫んだ。

「はあ～、やつぱお前かよ『角』。」  
ゼノはため息混じりにそう答えた

おいてけぼりの三人はポカンとしていた。

「ねえゼノ、この人知り合い？」

三人を代表してサラが疑問を投げ掛けた。

「おっ！もしかしてその子が例のムグツ……」

「余計なことは言わんでいい……それより、何か用かロラン？」

「ロラン？ それって一年生の『剣角』のロラン先輩！？」  
と一人のやり取りを聞いていたナズナが呟いた。

「『剣角』？ それって学年上位の実力者って噂の？」

「『ハツ！ - そういう君は期待の新人の『紅嵐』のサンドラだろ  
？』

「『ウラン？何だソレ？』

とゼノが訪ねた

「サラちゃんの二つ名のことよ。」

ナズナが答えた

「水、樹、雷の三つの属性と紅い髪の毛からそう呼ばれてるのよ。  
「なるほど、同時に雨、風、雷が飛んでくるから嵐か。」  
ゼノは納得したように頷いた

「で、話を戻すけどお前は何しに来たんだロラン」

「ひでー物言いだな、せつかくの一年ぶりの再会なのによ。て  
か一応オレは先輩なのにタメロカよ。」

「今更お前に敬語は使いたくない。」

「なあゼノ、ロラン先輩とはどういう知り合いなんだ?」

「私も聞きたい。」

マルクとナズナの質問に答えたのはロランだった

「オレと『ハイツ（ゼノ）』とあともう一人で去年までバー・ティ組んで  
たんだ。」

「つつても一年間だけな。」

約一年前にロランともう一人が学園に編入したため解散したそうだ。

「で、いい加減何でこんなとこにいたのか教えるよ。『このクエス  
トはレベル2までしかないから本来お前がわざわざ、しかもこんな  
時間に来ているのはおかしい。』

「オマエに忠告しておくれためだ。」

「忠告?」

「オマエが新学期早々やらかしたせいだ・・・

「周りに田をつけられた・か?」

「それもあるが『爪』の奴が探してる……せいぜい気をつけろ。」

ロランは忠告した

「あの規則馬鹿がか?」「ああ、何せ無許可の決闘だつたからな。

ただ『爪』よりもアイツのほうが御冠だつたけどな。」

「ヤレヤレだ……」

「ねえゼノ、わしきから角とか爪とかって何の話しなの?」  
サラが疑問を投げ掛けた

「俺達がパーティを組んでた時の呼び名だよ。」  
「オレが『剣角』だから角、もう一人が『雷爪』だから爪だ。」

「じゃあ、ゼノは何で牙なの?」

「それは……」

「?」

ゼノがどもつたのでロランが後を引き継いだ  
「元々『牙折り』と呼ばれてたから牙にしたんだよ。」

「牙折り? 何なのそれ?」

「ああそりゃあ……」

「ロラン!!」

ゼノがロランに怒鳴った

「わ、わりい……」

「……いや、こっちも怒鳴つて悪かった。」

「すまないがサラ、その話しじはまた何れ……」  
「わ、わかった……」

「じゃあ、悪いけどそろそろ行くわ。」

「おへ、弓を留めて悪かつたな。」

やつぱりと口うんは出口の方へ向かつて行つた。

「……その、『めぐねゼノ』

「いや、此方こそ……ただ『牙折り』はとつててた名前だから

「…

それから一行はとくに会話もなくクエストを受注して受けに向かつた。

## 17話 クエスト開始

「ところで、今のうちに全員のギルドクラスを確認とかないか？」  
クエストを受注し終わり、王都の西側に広がる草原を歩きながらゼノが唐突に提案した。

「確かに確認しておいて損はないかもね。」  
と言つてサラがギルドカードを差し出した

「どれどれ……『ウイザード』か、『杖』はその長杖だよね。ナズナとマルクは？」

「私も『ウイザード』よ。『杖』は短杖」

「僕は『シューター』だよ。『杖』はこれだよ。」

そう言つてマルクは懐から自分の『杖』を取り出した。

「何これ？」

「もしかして銃か？」

それは一丁の拳銃だつた。

「その通り。僕は魔力の総量が少ないから、遠距離の魔法限定だけ魔力消費が少ない銃は打つてつけつてわけ。」

実はマルクの魔力総量は平均の7割程度しかない、そのため中等部に入れなかつた。

「でも魔力の量なら修行しだいで増やせるぞ。」

「これでも一般に知られている修行法なら試してみたんだけどね。魔力は適正属性と違ひ増やすことは可能だが、普通は爆発的に増える物では無いのだ

「かわりに『熱感知』の魔法みたいに消費魔力の少ない熱魔法は得意だから素敵は任してくれ。」

「ところでゼノくんのクラスは何なの？」

「ああ、まだ見せてなかつたね。ホラ」  
ゼノはギルドカードを三人に見せた。

そこにはこう書かれていた

- - - - - - - -

名前：ゼノ・アルフレイン

ギルドクラス：ビースト

レベル：4

- - - - - - - -

「何これ？」

「ビースト？」

「えつと、ゼノくんの『杖』はその短剣じゃないんですか？」

ナズナはゼノが腰に携えているナイフを指差しながら聞いてみた。ちなみにナイフなどの短剣を『杖』として使用する冒険者のクラスは本来なら『レンジャー』と呼ばれるのである。

「いやコレはただのサバイバル道具だよ。必需品ではあるけどね。

ビーストってのは特殊クラスの一つなんだ。」

特殊クラスとは、使用する『杖』がギルドが定めたクラスの対象外である冒険者に『えられるギルドクラスのことである。余談だがこれがあるせいで今までゼノのカードを見たギルド関係者や冒険者に詳しい者達には彼が『牙折り』の一いつ名であつたことがバレていたのである。

「俺は『杖』を使わずに素手で戦うからクラスが、獣、になつたらしい。」

「ちょっと待つて！今とんでもないことを言わなかつた！？」  
「素手つて言つたように聞こえたんだけど…」

マルクとナズナは驚いたがサラは冷静に疑問を口にした。

「ねえ、ゼノが徒手格闘を使うのはこの前聞いたけど何で籠手を使わないの？」

「それは俺には必要ないからだよ。正確には使うと逆効果になるんだ。」

「どういうこと？」

「まあ、何れ解るよ。」

そう言つてゼノはほぐらかした。

「それより、そろそろ森に着くぞ。」

一行はいつの間にか王都の西に4kmの地点にある名も無い森の入口に着いていた。

「とりあえずクエストを確認しとこ。」

「……まあいいわ。わたし達は『薬草を5束採取』と『大猪を1

頭討伐』よ。」

「僕達は『水草を5本採取』と同じく『大猪を1頭討伐』だね。」

「でもゼノくん、何で大猪の討伐を受注したんですか？採取だけでも時間がかかるのに。」

ゼノは受付でクエストを受注する直前に当初の予定に無かつた討伐クエストを追加していたのだ。

「それは水草は大猪が好んでよく食べるからだよ。だから採取に時間かけていたらほぼ確実に現れるからついでにね。」

つまり、どうせ戦うことになるから殺つまおつぜ といふことである。

「とりあえずノルマは薬草10束と水草10本でそれ以上は余裕があればその時に、つて感じで行こう。」

「「「了解！」」」

この時三人は気付いてなかつた。

ギルドクラス以外にギルドカードに記載されたゼノの異常性に……

- - - - -

「あつたー」これでコツチのノルマはとりあえず達成したわよ。」

「了解！俺達の方もこれでノルマ達成だ。」

森に入つて5時間が経過した。既に太陽はほぼ真上から大地を照らしていた。

「マルク、辺りに魔物はいるか？」

「とりあえず近くにはいないみたい。」

「わかった。じゃあ一旦休憩にしよう。」

「了解、じゃあナズナさんお願ひします」

「任せてマルクくん。『大地よ』」

ナズナの魔法によつて地面が盛上り、石で出来たカマクラが完成した。

「すごいな、同じ基礎魔法の『石造り』なのに俺のとは比べ物にならない……」

とゼノが感嘆の声を漏らした

「これでも一応地属性だから……」

ナズナは照れながらそう返した。

「さて、そろそろ他の生徒も増える頃だと思つんだけど……」  
一行がクエストを開始してからまだほとんど他の生徒を見かけていなかつたのでゼノが不思議そうに呟いた。

「あのねえ、初めてのクエストでこんな森の奥深くまで探索する生徒なんかいないわよ。」

「えつ？」

「ゼノくんは慣れているみたいだけど……」

「正直僕達もゼノの言うとおり4人で行動してなかつたらとてもじやないけど……」

数年間のクエスト経験のあるゼノと違い、今回が初クエストの3人にとっては十分にハイペースであった。

「（）めん、気づかなかつた……」

「気にしないの！ホラ、ゼノのお蔭で既にクエスト二つはクリアしたも同然なんだから！」

「そうよ！それにゼノくんがいなかつたら今回の課題はクリア出来ないだろうし。」

サラとナズナはそう言つたがゼノは浮かない顔をしていた。

その時……

「これは！？」

「どうしたマルク？」

「大きめの熱源が2つ近づいて来た！距離は200メートル！」

「来たか！」

「よし！行きましょ！」

勢いよく飛び出したゼノとサラ  
対してナズナとマルクは

「ちょ、ちょっと怖いかも…」

「実は僕も…」

カマクラから飛び出した一堂、そこで - -

「なつ！？熱源が増えた！」

「方向と数は？」

「数は一頭だけど方向はさつきの一頭の反対側から近づいて来てる  
！」

それを聞いたゼノは少し考えた後

「じゃあ、俺が一頭引き受けるから3人は残りの一頭を頼む。」

「なつ！？ちょっとゼノ、本氣で言つてるの…？」

「大丈夫だ。大猪はクローゼ村にいた頃に何度も狩つた獲物だから。

狼狽えるサラに対してゼノは平然と言い放った。

「対処法はさつき教えたよね。たぶん大丈夫だと思うけど何かあつたら直ぐに呼んでくれ。

それに一回は戦闘を経験しておいた方が今後のためになると思うから頑張れ。」

そう言つてゼノは一頭がいる方向に走つていった。

「…ゼノくんの心配をしてたのに」

「逆に心配されるとはね…」

ナズナとサラは苦笑いするしかなかつた  
ガサツ

「来るよ！」

「は、はい！」

「戦闘開始ね！」

三人は《杖》を取り出し身構えた。

サラ達三人が身構えると同時に正面から全長2、3メートルの猪が飛び出してきた。

「ナズナちゃんお願ひ！」

「うん！『捕らえろ土の腕、アースハンド』」

ナズナは地の初級魔法を発動した

大猪の真横の地面から、土で構成された巨大な腕が大猪を捕らえようと伸びる

「フギイイイー！」

大猪は鳴き声をあげると同時に真横に方向して迫り来る土の腕に突撃して蹴散らした

「よし！ナズナちゃんは下がつて、作戦通りにお願い！」

「わかった！」

「次は僕達の番だね！」

ナズナと入れ替わってサラとマルクが前に出た

「マルク君、時間稼ぎよろしく！」

そう言つてサラは雷の魔力を練り上げ始めた。

「わかった！『アクアバレット』」

マルクは『水弾』を大猪の横面に掛けて撃ち込んだ

「フギイー！」

大猪は攻撃をまともに食らつたが、一鳴きするだけではとんビダメージを受けていないようだつた

そして大猪はマルクの方に向き直つて突進してきた

「くらえ！『ミストストリーム』」

マルクは正面から突撃してくる大猪に『濃霧』を放つた。

大猪は霧が飛んでくるとさらに加速して真つ直ぐに突っ込んだ

大猪の注意が霧に向いている隙にマルクは横飛びで進路上から逃れた

（ゼノの言つた通りだ。）

マルクは森に入つて直ぐにゼノに言われたことを思い出していた

~~~~~

「そついえば、皆狩りの経験はあるの？」

「今更それを聞くの？……わたしは無いわ。」

「僕も」  
「私も」

「じゃあ、大猪と戦う時の注意点を教えておくよ。」

ゼノが言つた、注意点は三つ

一つ、大猪は自分の頭と牙の硬度に自信を持っている、そのため自分に向かつて飛び込んで来る物には必ず正面からぶつかつてくる

二つ、攻撃方法は突進のみ

三つ、大猪は腹部が柔らかいためそこを狙え

「あとは基本的な事だけど森の中では必中の時以外は火を使わないこと、火事になつたら大変だしね。」

~~~~~

「ていうか、ただでさえ僕は攻撃力が低いのに火属性を使えないのが辛い！」

愚痴りながらも上手く聞合いをとつて『水弾』を大猪の全身にまんべんなく撃ち込むマルク

しかし、大猪はそれを意に介さずに真っ直ぐに突っ込んでくる。

「やらせません!『ストンシルド』」

それを阻むためにナズナが地属性の基礎魔法『石盾』を発動した  
これは『石造り』の魔法よりも発動が速く丈夫な防御魔法だ

『石盾』に大猪が凄まじい音をたてて衝突した

衝突によつて大猪の突進は止まつたが、盾に大きな亀裂がいくつも走つた

しかしその一瞬の隙をサラは見逃さなかつた

「どどめよ！」降り注げ、天空の怒り！ サンダーボルト！』』

サラは練り上げた雷の魔力を開放して中級魔法の『落雷』を発動した

瞬間、轟音と共に目が眩む様な雷が大猪の脳天を貫いた

そして - -

ズーン！！

大猪が横向きに倒れた

大猪は感電してピクピク動くのがやつとのようだ

「ふー、作戦成功ね。」

サラが汗を拭いながらそう言つた

作戦とは実にシンプルで

マルクが敵の注意を引き付けながら水弾で相手を濡らして

ナズナが防御魔法で相手の攻撃を一瞬でも止めて

サラが渾身の雷魔法を叩き込む

それだけである

「僕だけあんまり役に立てなかつた氣がする…」

「そんなことないです！マルクくんが注意を引き付けてくれたお蔭です！」

落ち込むマルクとそれを慰めるナズナ

そこへ…

「そうそう、それにマルクが相手を水浸しにしたおかげでサラも雷を精度を気にせず射てたんだし。」

「そうよ、わたしの『サンダー・ボルト』は命中率がわる……」

「ん？ どうした？」

「…」

いつの間にか当然のように会話に参加していた灰色頭に三人は啞然としていた。

「まあ、まだまだ無駄な動きもあつたけど初めてにしては上出来だ！」

「…………え？」

「な……な、な……！」

「ちょ、ちょっと何でゼノがここにいるの！？」  
それぞれ驚きの声をあげる三人

「ん？いや、速攻で終わらせたから様子を見に来たんだ。具体的にはマルクが回想シーンに突入してる途中から。」

「いや、何の話し！？」

すかさずツツ「ノリを入れるマルク

「あのそれで大猪は？一頭いたはずでは？」

「ああ、そこに有るけど」

ゼノが指差した方向を見るとそこには背骨が変な方向に折れ曲がつて絶命している一頭の大猪が転がっていた

「うそ……」

「わたし達はあんなに苦労してやつと一頭倒しただけなのに……」

「……どうやって倒したんだ？」

「突進をギリギリで回避して背中に全力で手刀を叩き込んだ。それより、さつやとノイツの牙を採取しよ。」

「あ、うん……」

討伐クエストでは倒した相手の指定部分をギルドに提出することで達成となる。

……ベタだつて？別に良いじゃない、人間だもの

「採取が終わつたら飯にしよう。」

「……そうね。言われてみれば朝から何も食べてなかつたわ」

「ちょうど肉も手に入つたことだし」

「「「えつ！？！」」

先ほどより驚愕する三人であつた。

（二十分後）

「よし、焼けたぞ。」

「「「……」「」」

「どうした？食わないのか？」

俯いて黙り込んでいる三人にゼノが大猪の肉に食らい付きながら聞いた

「……いやだつて、コレさつきまで生きていたやつだし……」

「それに目の前であんなのを見せられたら……」

「ちょっと食欲が……」

先ほどゼノが行なつた、大猪解体ショー、を見せられた三人はすっかり食欲を無くしていた

「まあアレだ！騙されたと思つて食つてみろつて！」

しかし、ゼノは三人の手に半ば無理矢理肉を握らせた

三人はしぶしぶそれを口に入れた

「……」

「これは！」

「おかわり！」「早いなオイ！」

「でもちょっとショックかな」  
食事の最中にサラがふと呟いた。

「たつたのレベル1のクエストなのにあんなに苦戦したなんて

」

「う、たしかに

」

「ゼノくんなんてあつさり倒していたのに

」

「いや、だつて三人共初めてだつたんだろ？」  
俺の時よりずっと

とスゴいよ。」

落ち込みはじめた三人にゼノがそう言つた

「俺なんて大猪の突進をまともにくらつて死にかけたからな。」

「ゼノが？」  
信じられない

」

「それに比べたら、マルクは無傷で突進を避けてたし、ナズナは突進を止めた、それにサラは一撃で仕留めた、全部俺には出来なかつたことだ。だから自信を持て！」

ゼノは三人の眼を見据えてハツキリといい放った

-----

「そ、それでは 2ペアともに四つクエストを完了と成ります

」

四人は食事を終えて、その後薬草を5束採取して支部に帰つて来た  
そして現在報告を終えたところなのだが

(「ね、ねえ受付の人顔がひきつってない?」)

実は大猪の討伐はレベル1クエストの中でも限りなくレベル2に近  
い難易度の為、間違つても初クエストでこなす依頼ではないのである

「それでは、またの」利用を」

ちなみにこの事実を翌日知った三人にゼノがこりびどく怒られたの  
は言つまでもない。

ヤベ

オチがいまいちだ

え、全体的にいまいちだつて？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8444y/>

---

～碎牙～

2011年12月15日22時46分発行